

泉州小田居茶屋
攝州殿 下茶屋 三日太平記

作 者 近松半平
竹本三郎兵衛七洛二

○第壹

行水の流はたへずして、且きへ且結びて志かも元の水よあらず、世の盛衰も水の如し、あるひは乱あるひは治り、隨ひ靡びく天が下「百繼餘り」の、
皇後陽成院の後代よ當つて、武將足利義照威權おどろへ、駿州の今川越後の謙信甲斐の信玄、三國かなへのぞく鉢先をあらそひしが、小田上總之助平の信永尾州おふこつて四夷八蠻よ切靡け帝都穩ありければ、
悔も櫻もほころびて都は、春の心地せり、時しも天正十年如月下旬、信永の武功よよつて内大臣よ任じ、嫡男城之助信忠其外一門官位よ叙し、先祖大政入道の古例よよつて、西八條よ別館を志づらひ官位昇進の祝儀とて、信永の恵息女千本の姫西の對よ入たまへば、河内國志貴の城主松永彈正久秀、陪臣林監物と召連參上し、先以て今日は、信永公の官位昇進

の祝賀として、諸國を在京の大名思ひくの生花遠近の珍花珍木めい
めい付札又名を記、心なき非常の草木なれ共君を祝し奉ると、次の問
伺公仕ると相述れば、是へ久秀殿太儀へ、此館へ父君の下館な
れ共在京の間彈正殿又預參あれば、心づかひの程思ひやります、殊々母
君うてな様も近よりは上京あれば、其通り上げませふ、こなたも知ての
通り、父上の好遊べす茶會の生花見なれ開馴姫させの、耻かしけれと
善惡の指南頼まするどは袖を覆ひせ給ふは顔べせ、いざよふ月の年
べい花も及べぬ姿なり、彈正も手をつかへ、は指南すも憚り有先と拜見
仕らん、ヨリヤ監物、お次より扣へられし諸侯の面よりそふみに、は祝儀の生
花千本様の一覽より入れられよと方傳へよ、早よと有ければ、承りて
林監物お次より立て呼つたふ、詞の下より三田の領主山口九郎次郎、切竹の
花生、梅と柳と投入で、千本の籠より一禮述、花生かけ置き扣めれば次より

出しひ膳所の城主青地駿河之助盛高圓壺又槿花の生花生同じくかけ置
き座よつけべ續て高木左近之進編殘しの籠花生よつひの花の一色生
高櫻の郡主山中鹿之助百度切ふ白玉椿風情を盡して見へければ松永
彈正すしみ出是何れも苦勞千萬今日の祝事千本様よりも満足
生花の衆議判ハ慮外ながら此老人各ハ白書院へ出有て千本様の
盃頂戴遊ばせいざくあれよては休足と挨拶すれば四人の人ゝ然ら
ば我よ仰よ任せ奥へ參上仕らん方事宜しくは老人を頼奉ると各式禮
事終り奥の一間へ入よける監物參れ長岡藤孝の嫡子細川與市郎藤成
まだ出仕めされぬか、又不埒千万早くくよ監物が、お次へ立間もあ
らばこそ、與市郎藤成十七才の角額、上下立派又大小もさすが藤孝の嫡
子と見へし美男草水盃又浮落花の花生さしげえとやかく座よ附べ
與市郎殿遅参く最早何れもば花生持參有て白書院みて酒頂戴

千本様又もは待兼先よ是へと彈正の、詞よついて頭をさげ、早速は祝詞
 や上る筈なれ共、生花又心をいため思ひざる通參の不禮、は用捨なされ
 下さるべしとつゝしんで述べられ、姫はとこふの挨拶も與市郎の顔ば
 せみ、見どれ入たる其粧ひ^ア、いやく、遅參を咎たるは老人の性急、必心
 よさへられなく近々與市郎殿^{シテ}持參の生花は此水盆^{すいはん}か面白しく、
 千本様の御手際^{まわ}を拜見致さん、女中方に花生と云も敢ぬよ奥女中、釣
 花生^ア籠一枝いものつるをみだしかけ、千本様のお物好と前々指置
 て、女中の一間へ入よける監物^{かんもの}の差心得、諸侯方の花生一束^{いづつ}を拜見
 と、や上れば成程く、老眼の目鏡^{めがね}を赦免下さるべしと、一束^{いづつ}見渡し
 テ、何れも生たり入れたり切竹の花生^ア梅と柳雲霞海を出て曙梅柳
 江を渡つて春なりといふ詩の心出來たりく、次の圓壺槿花の授入、風
 情面白し去ながら、槿花は生ぬ物といへど利休が粹宗^{さいそう}旦常^{づつ}好で生た

る由聞及べば、談りとはいふべからず併種花一日の榮といへばかやう
の祝儀より用捨あらんが編殘しの籠よつれの一色、下かりの數され
いなりつはの花といふ、發句の躰を生たる趣向、百度切々白玉椿、古歌
の心で入たりく、置霜の、白玉椿けふぢや、八千代の春の始めなるらん、
信長公を祝せし生花めでたしく、與一郎殿の生花、水盆よ落梅花、梅
の花を玄ごき入、開たると替たると水上よ浮たる風情、詩歌よ寄たる此
生花、又千本様の釣花生よ筆いもつる、此お心ひ、信永公の御先祖平の忠
盛、後白河の法皇のほ亂を壊されし、祇園女郎を給はるほ制よせば
いはふ程よこそあまよけりたゞもあり立よ清くさかへんと、遊びされし
ほ制よよつて清盛と名乗給ふと承るさすれり先祖の古例の吉事を、生
花みなされし作意はとかうや上られず去よつて千本様の生花、老人
が衆議判致せり月の一、又與市郎殿の生花は、卷軸みて花の一、お若い同

士の卷頭、卷軸、主従でござらすべ、よい比な治夫婦拙者も年は寄たれ共、一花咲せし此彈正若い時の二度ない物、思召有ならば承へつてどふ成とつい相談は致しよいと仲人口々千本の姫心の内をいわつゝじいれねばこそあれ戀しき物とみやり給へば與市郎も俱又目と目を見合せて、赤らむ顔を見てとる彈正お姫様も與市郎殿もよき折からの治上京、天氣ならば明日ハ伏見桃山の花盛^{さかり}と存すれば、與市郎殿諸共又千本様の治供致し治見物遊べせといふ又嬉しさ飛立計り、それ何とよきあぐさみ、細川殿も俱又成程^{なるほど}、譬へ叶ぬ用事有共、千本様の治意なれば、治供を致せん^ナ與市郎殿^ヲ私とても都ハ初めて、此方もおずしめにて、桃山見物致たし^テ、嚙有ん^モ最早退出仕らんと、何れもへ治内意アセ、ナ何かとナ其中又はや春の日もたそかれ時、此彈正も老眼故か俗ニヤ鳥目の病^{にちめう}日没^{にちもつ}右兩眼共かつふつ見へず、夫ハ^ノ其不自由さ、正真^{じん}

の盲目に推量下さるべしと、粹を利して松永が見へぬ顔する心の工。二
人の玄つと諸共、裳踏程ならべ共、顔と顔とを見合す計、思ひ餘つて詞
より、何かの事、夕間暮、早退出と監物が、案内によつて彈正も、然らばお
暇先以て今日の終日よき慰千本様、も嘸に退屈、万事の明日くと一
禮述べば、與市郎、早ふ暇と立出る、名残おしかのつかの間も、離軒がたな
き千本の姫、じつと目と目を見かへすが、互々戀の始とい、外み夫共白晝
院、立出る人とも式禮述て退出有る素袍の袖の長日も、西よ入くる太平
の世の春こそ。

○第二道行花見の粧ひ

振袖の内、詞の隠れ家と、人目忍ぶの玉づさよ、心のたけを書がかり、信
永公の後息女千本の姫と聞へしり、けふ九重みならびある、花と三吉野
櫻より、詠よあかぬ品かたちかざり立たる乗物も、つねにからむの附。

もよよめき渡る春の野みつまごふ、雉子のねをのみぞたれと伏見の車。
ちかく、遠山松の、ちらくと、外めづらしき道くさみ、道はかどらぬ女子
同士あゆむ、すあじみすべ草履すいな仕立も水ぎわの、立ま宏りても目
みこるきつゆ深草を跡みなし早すみ染の別れ道、一筋ならぬ二筋の帶
の、峯やらどけこしもの名も青柳の柳腰のこんの月へ姿見の野邊よ
さえだが、朝けわひ裳はらく行跡よ、ふりかたげたる茶辨當花もうせ
んの紅いも、そのをようゑて隠なきは姫様より此奴あらびなんく、七
やさの、招子とりトは主人の機嫌笑顔や打連立桃山、さして行のべみ
ききもわかべの、色見へて、君と連理の枝高く、ひよくの契り取とのなれ
がねさめを誘ひくる風よ乱し玉くしげうつりなつかし、ゆかしやど濡
れてほすてふ袖袂縁を結ぶの髪形、取ありしやんど青柳さえだいざめ
慰さめ行く道の、里の子供が聲よ、松よ懸するヤレバレ主に有馬の峯ら

よなもつれ、シシくわふ夜のよい中ト書た。戀をする身のやれとへき、主は春馬
の玄らふちもつれ、シシくわふ夜のよい中トヨイナ歌の玄やうがも身よどしむ。
玄ぐれふり袖かざしもやらぬ、一村さつと春霞、いは乗物へ花やどりめ
させ給へば六尺共かたも揃への足どりは玄つとんく、玄どやかよあ
めもおやめば空はれて、けしきまばゆき花の浪桃山、ちかくづま給ふ、喚
ませし花の木影を踏分る、細川與市郎藤成年もいさよふ角額、身の櫛式
も氣につれし、下部がさげしたばこ盆^{ほん}時繪のすゝき穗^はよ出る、千本の姫
も物見^ぞ夫^そと見初し戀人の與市郎様かといふ間なく、見へづ隠れづ隠
る木の間心汲取^{くろごと}共^{とも}、乗物はようど、せく折から先習くと聲をかけ松永
彈正久秀年老^{そしゆうね}れと岩疊^{がんとう}作り、長袴^{はかま}の裾踏^{すそよみ}だき歩來^{ある}る、姫の差圖^{さしふ}よ六
尺共^{じよ}暫^{しば}立る乗物の戸^戸を押開^{おしひら}き千本の姫、しとやかよ立脚^{すく}給ひ、^{いは}松永
夫^{おと}いなせの音信^{おとづれ}もかりらぬ老の氣晴^はよをあだむ花を見物かばん

ひ仰の通、ほ姫様より桃山は見物と承り、某も浦山しく見へ隠れの候と存、いら立老の足より任せ先刻より扣へおりました、何とほらうじませ、花の櫻と賞斷致し、桃などは一向戯め共斯咲亂れし有様、梅も櫻も及ばぬ詠よい氣色でござりませうが、さればいの、此桃山の花盛暉又聞ど見るに初艶いといはふか、見る人多き其中に懸しき花の一枝を手折べ落花狼籍と、餘所を憚る自が心の内、よもやそなたも合點行まい、松永と遠道から歩かけたる懸咄し、夫と悟れど彈正久秀、只今のほ一言何とやら存すれど、年寄たれば左様の頓智、及ばずながら返答を花物いれねど此桃の盛事ふ粧ひよ姿心もふり分のかみも結ぶの縁の綱、引手よなびくお心をちらと見付た某は、さらく無理と存ぜぬ所存、盛の花も肝心の折人がなけれど詮なき仇花、月と村雲花と風散ぬ其間よき枝ぶり、折人の妙手本様より其一枚、此桃山の傍邊細谷川の流と浸し、手生

みなさるが肝要かんようと、顔おもてと似合にあつたぬ松永が、色香を含くわへ此場の時宜じきよ、姫ひめへ嬉しく、そあたさへ其氣あら、誰だれよ遠慮とんりよも與市郎様、彈正諸共くわいどいて給たまふと聞きもあらせず、いやく、手前まへがやハ桃の花、與市郎殿うじろうでんと何人、お家の執權じゅうせん松永彈正、左様さうようの取持とりもちハ仕つからぬ、餘あま見事みじよ思召故おもなづけ、一枝折ちぢて家づと夫めも人の咎とがめ様よう、けふを限りと思おもさず共とも又またくる春はるよ咲花さきはなを、必外かならずへ折ちぢさぬ用心おもひ、一枝いっしを折ちぢべ、一指いっしを切き、約束やくそく堅かたく禁制きんせいの札ふだでも立て、置おきめさど明あはていりねど懸中けんちゆうを、花はなよそへて松永まつながハ云いす語ごらず、立て行ゆ勉めん共ともの聲こゑよ彈正様たんじょうようの今いまの仰あお、知しても玄くつらぬ粹すいの水上みずかみ、ヤアお姫ひめ様よう、此上こゝりハ天井拔あひ細川様ほそかわようの花見はなみの宿しゆで、直ただよくぞぞいて色いろよいお返事かえじ、ナアお拾ひひとひと、進すすむれど、わしや耻はずしいが精せい一ぱい立端たてはよ迷まよふ其折そのまづから、細川與一郎藤成家來とうじやを残のこし、只ただ一人、花はなよ心こころもこゝかし、こ廻まわる數いくつ盃はいもさます、道草みちくず手折たづし花携はな來くわへる、ほろ酔足よひあし、姫ひめの目顔めがほを見て取とる二人、與市郎うじろうが傍そば近く馴なまくし、事ことながら。

私の青柳さえだと乍者、則主人の口上より見れば譁しきお侍様の手より
れ給ふ其一枝を受度てこつちの望くるしからずには主人へお上なされ
て下さらば使の面目姫の悦び、アハ返事と兩方々貰かけたる一枝を渡
りかけたる懸の橋、與市も下行水の面よるべをえたる心の底、コレ女中此
一枝は某が家土産と存すれ共、お顔の見へねどあなたのお目みどまら
べなどか花の名を教へられよと差出す青柳さへだ詞をそろへ、前
桃の花、サア拙者が望む此桃の咲亂たる胸の中、一通聞てたゞ去年の春難
波よて、ちよつと見初し初戀路、こつちよ思へばあちからも親の目顔を
忍びの懸、出合ふた其日の末の五日、天神様の縁日梅を断やら願かけ
て、必かれるあかららじといふもせんしき初てにこわいくよ引され
て、つい云事も得云ず別る折しも春雨よかさのほ無心夕暮時、相合傘の
道草も差合なしの暗紛れ、又の逢瀬をいつくと毎日みの返事をへ後

より盡る様よ成、ちよつと首尾して北野の出茶屋歩行間もしどけなく、
玄かつたと思ふてたゞ、そりや其筈いな待ると侍身よ成などいふ
譬、そりや呵らいで何とせふ、其跡ひどふ玄やへと尋る二人の必より
なやめ給へる千本姫、見合す與一が恂り仰天、是れく千本の姫様眞平
お赦し下さりませと、遙んとするを引とめ、よその懸よと浦山玄さか
物語を聞まほし、語り給へと摺寄ばへてわる業な事計と抜てもいつかな
放さぬ必、お姫様のお望が叶ひぬと傳ヤこちらが誤りひらよせひと
せつかれて、めいわくながら興市郎、其日の別れの黄昏の鐘よ誘ひれ歸
るさみ、送りしゆのちらし書、其やさしさの數より、さぞあ舟よも車みも、
よもやつまれる玄よまいがな、シテ其ゆの文句へへ人目忍ぶの事あれど、
いらぬ所のそこへよ讀ながしたる奥書よ、あすり必川舟で名も住吉
の浦傳ひ、舟又二人が顔と顔見れば見るほど其面ざし、あなたの顔よ生

寫し。つもる咄しの其中又早住の江の浦浪も引汐時と沖中又女男のわ
かちなく、覗蛤踏姿岡目み見るさへこのもしき何がいこふと云出して
いどめても止らずかう手を引二人の裙も吹上る濱風さむく身又ぞゑ
みぞつと寒さ又抱ゑめ合せし口の蛤を、わしがふもふと其の方が先へ
歩んでも有ふがな、さつてもきついお前へ見通し先又歩し足元の其あ
ぶなさを後から見し玉垂の内も床しと思ふ互の懸路離ぬ中の二人
して漸拾ふた蛤の七つ何事ない様と、ゑんぎ祝ふて又船へ乗と其儘さ
し事の數かさなりて平亥いよ此青柳なら其時又も一つ上れと盃を押
へた段か如在なふそこでこつちもお間といへば、さえだが引取わゑや
見るくと突戻す、其盃の納りは四かい浪やら千秋樂の聲も千本の松
吹風、早盃も引汐又休らふ船の戸障子を、ゑめてゑつぱりねましたと、咄
すもゑどけなまめけり、細川與市心付、我ながら誤つたり、少の酒又此

身を忘れ女中計の眞中へ、不禮はぬ免と云放ら立を引とめしや、其お姿
を見初しる、こがれくし自分が、戀しう思す方様も似たと有しが力草せ
めで由縁と思召叶へてたべと取手を拂ひ勿体ない、お前様の誰有ふ、
小田信永公のお息女千本の姫様我よ式よ惚とは下主と見かけてかな
ふりか、私に信永の娘なら、お前迎も細川左京太夫、藤孝様のお子息、
繡川與市郎藤成様、信永の娘と縁組でハ何ぞお爲み成ませぬか、何が扱
露程も、なひと思さば今爰で可愛と只一言、チット皆迄おつ玄やんな、我迎も
其通、思は同しけふの花見、思ふ圖へいて譁いふ詞、必ちがへ給ふなや、
私がお前がど明し合たる胸と胸、ひつたり合す二人が中、様子いかゞと
松永は向ふ遙み見渡せど、見分兼たる老眼も、究竟一と遠目鏡見下すこ
なたの姫共、ゆくお姫様、いつ迄爰もござつても、肝心要の玄めくしり
は館でなければ坪明ぬ、忍び逢夜の約束を、早ふくよ千本の姫肌も付

たる香包、色紙、添て手に渡す。夫こそは蘭奢待、父の咄と聞及ふ。新田左中將義貞様帝より給つたる名香薰りし龍頭夫を印と、義貞様の兜といふ事隠れあき、例を爰々蘭奢の薰私が館へ忍びの相圖と、心付たる。此一品時はいつ共名香の薰る時こそ互の固約束變せぬ證據ぞと、以前の一枚取出し、桃は三千歳成と聞べ、譬面は合さず共、三千年も、万年も、縁の切ざる薔薇ぞと、渡せば取て、押戴き花や今宵の主といへば、取も直さず我夫の、お顔を見るも同じ事と、いへどもつるゝ萩薄、早に立と細川が家來の見るめを盡よして、ふり切袂見返る姫、青柳さえだが無理やりみ、連て館へ歸らるゝ、跡見送つて細川與市、最早日脚も申の刻館へ歸るもよい薄ぐれ、供の用意と云捨て乗物はたとさ志心得、敬ふ禮儀徒士若黨、いざに立と呼ばればはつとこたへて下部共、行列揃へてほつ立ろ、だい笠たてがさ大鳥毛、乗物ゆらずな志とやかみ、立つとんく志とくくく、どんぞ

打たる向ふより、のつしのしめよ麻 上下年べいはるか分別盛、ほ大身と
見るもはつと下馬先頭をさげ、館印を見まする所が細川家の印成
ど、ほ家來中のほ顔は存せず、先お乗物は何れの殿様、ほ假名を承はりお
詞下しおかれなべ冥加至極と手をつけば、お先手の者聲はり上、細川左
京太夫藤孝のほ子息同名與市郎藤成櫻、桃山ほ遊覽のほ下向道、ほ出合
やは武士の本望、三拜せよと、聞もあらせず、何細川家のほ子息とや、
日比某お目見へを願ふてもあき今日のほ遊覽、ほ目見へ致さば殿よは
ほ存、いざほ取次を頼存るだまれ慮外者、其方如きよ輕ことお詞給はる
細川ならず、^{いづれ} 何も捨置て行列く、畏つたとふり出す奴、こあたの侍身
動せず、^謂 とこへく、望かうつた拙者が目見へ、細川と聞ては一足も、先
へはやらぬこな大街め、^が こいつ武士よ向つて銜と、延過た其願切下
てくれんずと、云も果ず高笑ひ、^謂 某を誰とか思ふ、細川左京太夫が家

來原田主殿と云者、いで乗物の若殿、は對面すさんと立寄所支る下部
 はね退蹴退立かしり、既に明んとせし所、音もどつさり玉薬胸板打ぬく
 種が島手、持ながら松永彈正、伴藏引連悠と、血走る眼、邊をながめ、
 よしなき所へうせし故畫めが此死さま、^{ハテ}拵氣味よくくたべつたと死
 骸を蹴飛去、^{ナア}與市苦しうなひ是へ出よ、はつと詰て立出る、始の姿引か
 へて坂形輕き町人の息子ながらもわるびれず遙下つて手をつかへ、お
 賴の通十が九つ仕課せし所、細川の家老と聞いかゞへせんとためらふ
 中、彈正様のお情で、某が詮議もなく、首尾よふ參つてけふの手番、万事
 そちが働く出かした小西彌十郎、我望足ぬれば、一時も早く此場をさり、泉
 州堺へ汝が本國、一先歸り影隠せ、大望成就の其上へ、約束變ぜぬ我家來、
 天晴武士、取立る、當座のほうびと袂々、投出す包押戴金、朽ても朽せ
 ぬ主人、云々や及ぶ早急げばつと計ふ彌十郎、勇み立たる心、鞭胸

納て立歸る。とつくと見濟し七瀬伴藏、イヤ主君の底意何共合點參り立
せぬ、町人風情の忤を細川の一子と見せかけ、姫と夫婦の契約けいやくの深いは
所存べしいか、が、様子しらねば理り、某信永すいよ恨有はより、姫を欺り
縁組させ、後日の難義なんぎの信永すいよ詰腹切せ、國家のぞむを望我工夫くわう、コリヤなたべしす
などせいすれば、七瀬伴藏詞ことをかへしさほど大望思立給ふに主人より、
何故最前さいぜんの前髪まづみめ、其儘そのままにしてふ歸しなされたま、問迄どうもない彼かれより大
事を頼の印いんはや先達しんたつて主從しゆそくの約あくをなし置おきたれべ、きやつが口くちを渡わたると
いふ事ことけもあい事ことく、いやく、そりや御主君の思おもし違ちがひゆさば賤いやしい
下主げす下郎げらう、口くちべしるべしるハ慥たしかな事こと、一旦益だんえき立た上あはなせ打殺してお仕廻おとこな
されぬ、かゝる大事の破口やぶれは、得て足元あし起おきる物ものと、聞てさしもの彈正たんじょうも、
とつくと思案おもはんし實誠じつせい伴藏ばんざうがいふ如たましく、例たとへ則すこばら佐々木盛綱おど浦うらの男おとこを手て
かけしも、跡あとをふせぐ身の用心おもひ、そこへ心の付つかるつけ松永まつながが一生の不覺ふくわく

此役目ハ七瀬伴藏、彌十郎めをほつ付て有無を云さず只一打船塙を目充早く行、まつかせ合點とかけ出す、伴藏を後げさ、命七瀬があへなきさいご驚家來よ目もかけず、血押拭ひ刀を鞘納めた思案、乗物やれと戸を引立、所存を明て夕暮の兼ての工桃山を跡み見なして

○第三

春の夕暮ゆふぐれより山さんを見渡せば、折しも春風より櫻の花がちりかしるちりく
ばつと、花のちりたるゝ空そらより玄られぬ雪ゆきかと見へて面白おもしろや、松永彈正久秀の館やかたより、信永公の籠中わらわら親子の成迎せいぎやう、お次の舞の下稽古げいこ、庭の樹木じゆぼくを木作りが松の葉さきを木鉄はづかで、ちよい／＼座敷ざしきを玄つらふ、妙めうが、金屏毛氈敷島きんびょうとうぜんの定家家隆の歌書横物、水遣かこひ臺子だいすの飾和漢の器物、名物捕つかへ、一方ならぬ饗應こうとう也、館の主松永彈正執權林監物じつせんりんげんぶつを召連れ座敷の飾内かざりうち見分して、一間いつばんを出、女原掃除さうりへよいか、今日まいにちハ太切おほきの成不調法じょうぽう

のない様又監物、急度^{きゆど}付よ^{ハア}畏り奉る。木作、數日お庭^{にわ}にかゝつて、今日迄^{さう}明す、お成^なも追付、早く仕廻ふてお庭^{にわ}の掃除^{そうり}仕れ、いやく今暫く間もあらん、木ぶりの見苦しうい様^{がた}、わが踏^{ふみ}で居る枝ぶりが悪い^く右の方へ矯直^{きょうじき}せ、此枝でござりますかと足先で^{あし}數るを、見るも監物刀提^{ひつさげ}庭^{にわ}へひらりと飛^とおり、よつくい下郎め、殿の^お意を脚^{すね}で數る^う監物刀是へふりよ真二つと、鏃元^{くわげ}窓^{まど}立^たべ、木作り驚^{おどろ}かはてふためき飛^とり、^アやし枝^{えだ}を便^{たより}致^{いた}す故思^{おも}はず不禮^{ふれい}、^ア免^{めん}あされて下りませと頭^{かし}をさげて詫^{あや}けれど^{ハア}いか様^{ごと}梢^{すゑ}へ上つて、慮外^{かうわい}も顧^{かへり}ざる筈^{はず}、監物^{いんもの}赦^{ゆる}志^してとらせひの、意嬉^{おもい}しるよ木作りは、地^は又鼻^{はな}付^{つけ}て悦^えべ^{ハア}、殿の^お意下らず^ば打放^{うち}すやつあるよ、前髪^{まへ}有^{ある}で殿に^おも^ハ用^{よう}捨^す命^{めい}冥^{めい}加^がな木作り、^ア掃除^{そうり}仕廻ふて罷立^{まがり}、はつとこく^ハをかき寄^{よせ}る形^{かたち}そぶり、彈正^{たんじやう}つくべ^ド打守り、若年^{わかね}よはとし^ハきい奴^{やつ}、^{シテ}當地の者か但しは他所の者成るか^{ハア}私は殿様の^お

領分河内の志貴親共の信永様より仕へし者、夫なら武士の憚よな。アヤ
上るもお耻恥うござりますが、去る年柴田と合戦のとき、父の海老名八
郎左衛門は討死致し所領迄召上られ武智十兵衛も給へり、孤と成て浪
浪の身の上、信永公へ度々願ひ上たれど、討死致せ玄父が事も思召
出されず、一圓也取上もあく、情を玄らぬ大將といふに松永、近づ寄、
左様ならば信永公へ某や上べきが奉公ナす所存か、アハ仰は有難け
れど、恨有信永又今さら仕へる所存はなし、只今又も有、小田又敵對大將
あらば若年なれ共は味方をナ真先がけ、信永の首討取所存と、面色筋を
あらぐれば、玄か其心又異變はないか、ア私逆も武士の憚、變する
心さらくなし、ソ監物、わっぱめ又繩を打、畏つたと飛かしり、腕捻上る
を引ばづし、聊爾なされな、此木作り又何科有て、ア何科とい憎い下郎
め、當時信永公日本過半切立たがへ、内大臣又迄昇進し給ふ大將よ、怨を

舍へ朝敵同前、其者を見赦して、國郡給る彈正・小田殿へ不忠と成。サア尋常又腕廻せ、アは仰ひ尤憤りの存念を上たる若輩者故重きの不調法併繩目が醜い迎、一旦ア出せし事變する心さらくなし、殿のほ不忠又成ざる様又いか様共に成敗と思ひ切たる眼ざし、ういやつよい覺悟小田殿へナ譯又彈正が手をかけると悠々と庭より、刀すらりと、拵放し、觀念せよとふり上れば、身動もせぬ覺悟の顔色、彈正小首傾て、何と監物、よつ程肝のふといやつ、後より老人が杖共成べき丈夫の魂只今の科を赦し、某が召拘ふか奉公致すか、何ノ私を、ハサ冥加え餘る殿の意先達て毛手上の通り、志貴の領分にて出生致せし私なれば、谱代も同前又お召拘下されふなら、いくばくのほ厚恩ととび玄さつてひれ伏ひ、其性根あら召使ひふ、父が苗字を其儘又海老名の八郎、これ有難きほ仰主君を撰で奉公致す所存なれば、兼て用意を仕ると木鉄と諸共々包込

たる大小取出し脇狭父の苗字を起すのへ偏よ殿のほ厚恩とすくく
立て悦べば謂出かした汝が所存聞上へ物語る子細有殊々今日へ信永
公のほ簾中ほ親子を招待ヤせばお成迄へ間有ん八郎來れ主從の盃せ
ん監物一間へ同道せよと先よ立は木作りもわらじ解々塵打はらひ監
物よ引添て一間の内よ入よける程なく門前騒さわがしくほ簾中のほ興只今
入と披露すれば彈正一間を立て謂監物萬事よ心を付よと玄關迄出
向ふ絹の薰かはりも襠うちかけの裾よ波打長廊下信永公のほ簾中臺の前跡よ續て千
本の姫小野のお通も諸共よしとやかよ入給ふ是謂見苦しき彈正
が館へ珍らしきほ來臨いざ先よと儲たる褥じねよ請じ奉れば亥とやかよ
座よつき給ひけふハ久秀殿の心づかひ娘千本の姫都花見の其序此館
へ立寄たいと一向の願ひ夫故お通どもも伴ひしが信永様へ沙汰さわハ無用の
五千本アツカ自シが願ひよてけふの花見お下館の生花や桃山で見た花が最

一度見たまことに姫の誠、又彈正も夫といふれどとほけ顔、ア拙者が城下
は志貴の山家物淋しうて閑居同前環堵の室を出やらぬ女原繁花の都
を見たがれば、千本様の上京なされ度も尤夫いあなたのおつ玄や
る通此お通も稚時から都より育今信永様のお情受安土の城内より仕れ
バ氣詰り、是からは千本様幾日もくも上逗留遊ばして祇園清水嵯峨
の室の花の見飽を成れませ、成程左様、家人の此彈正お心置なふに逗
留老人がお饗みは利休が物好の圍で、鹿茶一ふく指上ふ、信永公もお
好なさるゝが、老ての樂みは茶の湯と存、小身者より似合ね調度東山殿
の器物、或は書畫名作など數多所持致す就中平蜘蛛とナ秘藏の釜もござ
れ共此釜譲べき件もなし、一代男の此彈正、ナ其釜の事ハ此お通も聞
及びしが、信永様のきついお望、成程此平蜘蛛の釜は所望みて度上の上
使、餘命なき老人が秘藏の釜より名残おしく今日迄延引、ナ長物語では退

届。今日のお慰み。都の舞子を以て覽み入ん。併舞子も及ぬお通様の以音曲。
矢ひきの娘淨瑠璃御前と、牛若丸の忍びを十二段又継。京大坂でもては
やす淨るりの始はお通様とふぞり作の淨るりと合せてごのみぶりを
ほ所望く。まづがもない彈正様、信永様のお情受千本様を身に懷し、生
れ給ふと臺様へ、母と云でいなけれ共、いひて子持、初の
孫子を見る時分も、あられもないか皇。アわたしや否く、ア其隱玄藝が有
故え、信永様のお情受、又臺様のお悪口をと、互に妬慳氣もなく、捌た奥
方お部屋様、女の操奥床し、ア陸じうて珍重く、ア監物、奥の間へ以案
内ゆ奉れ、ト監物は先立べ臺の前、ア姫お通もこなたへと打連奥入
給へべ、彈正も引添て成の間へと入よける、ちとせふる、行も子故も迷
ひ泉の堺よりばるト、きぬる鳥羽の、十徳着たる禪門の年六十の外門
方、留る下部を押退突退、ア扱來べき者で來たが何ぞや、四の五のいは

やる事ハない、信永様の奥様や娘ひめが此屋敷じきへ来ておやげな、直すよ逢あて
いふ事有早はやく、イキこいつ慮外者りよわいしゃ、さがれくも聞入きいりすせり合聲あわせ、監
物立出だきだし騒さわしい何者なにしら成なぞ、玄あんされくときめ付はりればア、お前まへは此こお館やかたの
お家お老お様さまか、門番下部もんばん下部しやぶ、云い聞きしても胡椒ごとう丸吞まるの、お前まへとくとトヤましよ私
は泉州せんしゅう堺さかいの町人まちにん小西こにし如清じよせいとシテ人ひとよ知しれた藥屋やくや、私が駿せがれの事ことと付つて奥
様さまやお姫ひめ様さま、ちよつとお目めよからくつて、云いたゞや直すよ歸かります、ほんほんほほお姫ひめ様さまよからくつて、一人子ひとりこの命めいがないナシ早はやく早はやく逢あせやつて下
さりませ。ヤイくう見みれば頭かしらをまろめ法衣ほういは着きれ共賤いりせんしい賣人うりにん、上う様さま
直すよお目めよからくふとは法衣ほういよ過すぎたる慮外者りよわいしゃ、ナシ上ある事有なべ玄關げんくわんの取次
迄となせな願ねひナシぬぞ、そこ立たく、立去たがすバ三寸繩さんしゆ縛しばり上あが動うごかぬかく、
いや其様そのようよめつたよめつたふろして貰もらふまい、そつちの爲なは上あうでもわれ
が爲なは姫ひめの奥おく様さま、お姫ひめ様さまおれが嫁むすめ、舅じゆが嫁むすめ來きたが何なにとしまし

たゞちやつと嫁よめみ逢して貰もらふ、やこいつ氣違ひ玄やな、をと骨ほねをたしか
ぬ様ようも縛しばれ、くしれど立かしる、ヤレ玄そらべらくと松永彈正、お通諸共一間を
出で町人まちにんながらまんざらの四夫共見へぬやつ、子細こざいをいへ様子ようしょをいやと
二人の尋たずね膝摺寄ひざすり、う、お前様まへようなどなたじや、自みづからお姫様ひめようもお乳うぶを上あたお
通とおと云者う、ウ夫それあらばナませう、私わ小西如清ちよせいとナ藥屋やくや、大坂おほさかの道修町別
家の手代てしろが小西と名乗なまなておりますからは、まんざら胡論ごろんあ者ものでもござ
りませぬ、私が伴とも小西彌十郎よしゆうじゅうらうとナす者もの、此月の差入都さしうつの得意うきへ人參にんじんを持
せて登のしました所ところ、伏見桃山の花盛はなざか見物みものして、ふしぎな事ことで二三日お大
名の子こ成なたと、店の手代共のみどりへの咄とつ、看經かんきょうながら聞きて、悔くやり、如來様じゆらいようもそ
こく呼よ付けて様子ようしょを問たずべ、細川與市郎様ほそかわよしろうようといふ、お大名の仮名かなをして、信
永様しんのうようのお姫様ひめようと、契ちぎりを結むすんだといふを聞きて、何なんが肝きもが潰つぶれまいか。こり
やたまらぬ大事だいじ、お大名の名なを驅かたたさへ謀書ぼうしょ謀判ぼうばんをきつい科く、まして況むしろ

お姫様をちゑくつたれば悴へり、勿論親兄弟從類を絶さるゝ、懲人様
が結構過て、佛頬ほくきんで地獄へ落る譬たとへのふし、ぞゝ神が立て恐ろしさゝ、悴
めは勘當してぼいまくり、夜舟よふねへまだるく陸からで登、此お館へ成と聞て、
お姫様を去よみ來ました。嫁女よめへの去狀よじょう請取て貰うけましよと、貴人高位
の遠慮なく薬研やくげんでおろす木薬や丸い天窓あたま又角立る、彈正詞たんじょうことをあらうげ、
僧そうが悴へりもまんざらの子供こどもでもなし、貴人高位の息女むすめと密通ひそかにうつは命づく
とい知て居よ、勘當せふが舊離きりを切ふが親共おやぢやうよ逆碟さかばりつけふのらが命みことり雲
泥くずの違ひなれ共、信永公も千本姫を法おとこ行ゆきひ給はねば、天下の政道立せいどうりが
たし、口でぬかした計て一大事の證據しきゅうご又ならず、證跡しきゆが有か、證跡しきゆなけ
れば紛れ者まぎわらわ其場そのばへちつ共立せぬぞよ、有ますく其證據しきゅうご、お姫様又
直ただ如清きよ如ご清きよとやら、最前からいふ事聞ききべそちは正しく狂氣きょうきじやな、い本
性じやう、本性じやうとは思おもひれぬ、我子の命計命めいで、余所の命は命でないか、夫めがそ

れ淺ましい町人心、此事故、千本様の難義へ天下の歎、百万騎の軍兵
が押寄ても恐れ賜はぬ信永様、此事を聞し召ならば、貴も賤しきも、子
迷ふ親心はそちも君も同し事、そこを思ひ計ぬは、亂心では有まいか、わ
しがいふ事尤と思ふなら、狂氣致してや誤り仕つたと、お詫をゆせと心
を付る氣くばりは、信永公のお部屋共いりるよお通の發明也。
夫は後
やらい、是へ是非へ非と事を糺が、武將の捷天と地といはふか餘り不相
應な縁組町人の子と將軍のお娘に顔見合す事もならぬ中、どふでも是
は取結んだやつゝ様子が有、此儘にして置てはどんあ騒動成ふもし
れぬ、蛇の目あくで洗ふた様よ、詮議しぬかよやいなぬ親仁、嘘つかぬ證
據はヨシ此香包と指出せば、彈正取てとつくと見、是は是信永公より千本
の姫よ譲られたるひ秘藏の香包、中より蘭奢待の一木、此木の東大寺の
名香天下を知賜ふ武將、一寸八分づゝ受賜ふより、外よ持べき香なら

す、町人の手又入たからは不義放逐^{せうちゆう}よ相違なぞ、禁庭へ入内有べき千本の姫下郎と密通^{ひそかに}あされし、小田の家の一大事、北の方千本様夫又て様子はほ聞ならん、大内へのナ譯はいかゞなさるゝ承へらんど、身の非を隠す詞の鍛石^{てつせき}ばつと計ふ通が當惑胸もふさがる一間の内、のふ悲しき泣聲^{こゑのこゑ}、何事やらんとかけ寄て、障子^{ひら}開けべ臺^{うど}の前懷劍^{いわいせん}よてふゑかき切今を限りのほ有様姫は悲しさやる方なく、自^まが誤^{まち}よて與市郎様でもない人を思ひ初たる不義の科^{とが}死るをあなたと見付られ、義理有中と思召^{おぼしめし}わたしよかはつてほ自害不孝の罪^{つみ}は何とせん赦^{ゆる}してたべと伏沈み涙^{なみだ}よ、むせび入賜^{うけ}よ、お通は母君抱かしへ、情ないほ生害、千本様の誤^{あやま}りよかはつて死るれ此お通、千本様の徒^{いなづら}も、産の母がいやしさといはるるが口惜いと、悔み歎^{あゆけ}べ臺^{うど}の方^の、これく^く皆もよふ聞てたも、けふの姫の身の上、立歸つて我夫へ、何とナ上られふ、血^{わけ}分ね共千本の姫娘よ母

よどいふからば、科はやつぱりわらひが科、そなたよかひるが父ほへ言
譯、よふ聞きや、父ほへ武士の棟梁、其娘と云るゝ身が親も赦さぬ夫定
そなた計の心でない外、工の其人も、夫と推量志てゆれど、此期又及ん
で詮議も無益、自が息の通ふ内姫の勘當、早ふ行きや、娘可愛き母が氣を、
思ひやれやと計り、歎き給へば、疵の口、流るゝ血汐、流るゝ涕、姫もお
通もたもち兼わつと計り、伏轉び前後も、わかず見へよける、如清も涕
の目をすつて、早まつた事なざれました、お姫様も惡名付る媒めを吟
味して、善惡を正さふといらざる老の逸徵、跡から廻る下主の智惠、お赦
されて、下さりませと悔ペいとい千本の姫、此年月の恩をば送らぬの
みか剥、自故のほ自害行と有逆此有様、どふマア見捨て行れうぞわらひも
俱えとすがり付、又さめぐと泣給ふ、お道理く、此お通も同じ事せ
めて暫のほ介抱、イヤく姫の行末、頼むそなた、如清とやらも立歸つて契り

の深い惡縁の根を斷切が子と、子の爲合點がいたかつてよい人も
今いの別れ際、最一度お顔と立留り行てい跡を、ふり返りおさらばさら
べも目もるゝ涙よ如清も黄泣わたらしもお供と引添ば、跡もはかなき
臨命終名残の霜とおき別れあくゝ、志ほれ出給ふ、は有様ぞいたゞし
き跡見送りて彈正久秀家來參れと呼出せば、答て立出る海老名の八
郎^朝、新參の初奉公、あれ見よ汝が爲よも遺恨有、信永の妻が死ぎま、懸悅
び此彈正も無念の返報仕返して心地よし、去ながら此趣安土へ注進^{トシマサ}
注進又及べず其逆心を見たる上、追付是へ討手來らん、首さし延て待
ておれは、何が何と、驚く筈、我を誠の海老名と思ふか、小田殿^{ヒロタニ}ニ代の
忠臣、森三郎左衛門が憚森の蘭丸、兼て汝が逆意の萌と志つたる故、武智
十兵衛光秀と心を合せ、木作と成數日入込、惡事の胸を聞迄は、蘭丸とい
ふ名は明されず、情なや臺様の、生害の其場へも參り合ぬ蘭凡が心

の内推量せよ彈正と鬼を欺く兩眼又無念の涕はらしく骨身を立
ぼる計りあり、彈正ハちつ共動せず、大口明てからくと笑ひ燕雀何ぞ
大鵬の心を知らん、七十又餘る此松永、孫ニ持べき汝等ニ謀られたとい
へれてハ武士の家瑾、信永又遺恨有事物語らんよつく聞、去年柴田を攻
る時、國の大小名、江州安土へ登城の折から、白洲より諸國の軍勢、當麻
竹葦と並居し、信永諸侯を急度見渡し、此松永こそ三悪人、一つ又は彼
が古主、筑前守義長をちん毒みて殺し、二つ又は足利義輝を攻亡し、三つ
又は南都大佛殿を焼亡せし三悪人、誰か是をバ惡まざらん、あの白髮類。
見よやとて笑られた時の我耻辱骨髓よ徹し忘られず、時がな、折がな、我
よ耻を與たる此鬱憤を晴さんと、堺の町人小西彌十郎と云やつを、細川
藤孝の慄與市郎又仕立千本の姫又戀慕させ謀課せて其事故又アレ臺も
自滅日比の無念少い晴れど、まだく忘ぬ我鬱憤、本國志貴又立歸り謀

叛の旗上せん物と手配用意真最中、立歸つて信永又直と討手と向へといへ。僧一人討取た、迫數又も足ぬ小童め、立去やつと白髪を、ふり亂したる其形相實又松永が叛逆の根ざしは是と、志られける。蘭丸又つと打笑ひ、さもあらんと計し故我木作又姿をかへ、木の間く又焰硝玄かけ、すりといふ時館を取巻相圖の狼煙是見よと、兼て用意のすり火燧陣松明又寫し取梢木の間へ投上れば雲をつんざく火矢の流星梢の狼煙四方八方打立る、相圖の陣鐘陣太鼓響渡つて聞ゆるよぞ道の松永をよつとして、口惜や殘念や、信永又泡ふかせんと計し、斯不意を打れたるい我天命大望も是切く、日比好たる圍み入て、最期の支度せんする問監物防矢仕れど、ちつとも動せぬ丈夫の老人悠々として入よける、さ憶したるか松永と奥をめがけてかけ入蘭丸向ふ又監物立ふさがり、ア推參成小童め、討取と下知よつれ、數多の家來一時又切てかしるを合

點と庭の樹木を小橋みて過つまくつ蘭丸が秘術を盡し働く、立足もなく家來共門外として逃出るを遁さざやらじと「遁て行奥の一間は松永彈正貯へ持たる和漢の器物、名筆の書畫、名作の太刀かたあ蜀江の錦吳郡の綾名香茶器に至るまで、炎と燃上る、庭の炎へほり込、投くべ暫時が間々烟となし、是より心残りもなしと千の利休が物數寄し園の内へ玄づくと打通り、さいごの茶の湯と心を世の外の閑居よ遊し優優と座しけれど八方取巻闇の聲、拘轟す湯の沸、金鉄皆なる待合の鐘も我身の寂滅爲樂禪悟の玄めし目下馴し茶碗も、初昔柄杓取手も上流の昔の所縁紫の巾沙茶巾の、取さべき今立登る此湯氣は時々會たる春霞ふぼろくとさだかならざる茶の、手前漸々獨服し心を澄す時しも有、武智十兵衛光秀用意の出立花やかみ跡よ續て森の蘭丸間毎くの戸障子蹴放し、かけ入一間の四疊半、彈正は寛然と盼もせず覺悟の軀戰ひ

勞林監物、斯と見るよりかけ來り、主君の支度み邪魔するやつべら、遁ざ
玄やらじと切て掛る心得たりと蘭丸が打太刀玄はつて丁と受拂ふて
付込手垂の若者、手練の監物、銘々流義の太刀捌浮沈早足よ明身もなく、
互よ鐔を削しが監物手疵みたゞよふ所を付入切込鋒を受はづしト
虎居よ轉ふを起しも立す首打落しつゝ立バ、武智十兵衛眞先よ進出珍
らしや彈正、其方兼て叛逆の萌有事、我とくとも知たる故、蘭丸を入乙み
置しよ思ふ黒星ちづ共達へぬ汝が逆心顯れし上からい遁ぬ所尋常
よ、サ切腹と詰寄る勇氣孫吳が智謀、武智が武勇をめざましけり、アうづ
虫共が存外千万、誰有ふ松永彈正久秀、年こそ寄だれ汝等如ハ手裏ふ有
共天運盡て今切腹せめて最期の思ひ出よ、大將の采配を持て死れハ本
望と打ふりく、我か名乗ハ久秀久しく秀文字なれ共、運命盡れハ旦の
槿花、武智が名乗も光秀秀文字かいらねど、遁天下よ秀人相我死後よ

思ひ當れまつた此爐ろよかけたる平蜘蛛ひらのしもといふ秘藏ひざうの釜かま兼て信永所望な
れば、汝等がよき賜たまものと釜引上て差出せり心得蘭丸取らんとするを、飛石
みてはつしと打わりうち、是をやつてよい物か、我死後に念殘らねど残り
多きに此臍はぞの緒を彈正だんじょうが若盛さかめよ儲もづけし男子しょくわ仕官しごんの障さわりと捨てれど、此伴だよ
有ならぬかくやみくくとく切腹きつぱせ玄げんと刀逆手さかてよ取直あたし、腹押はらあおくつろげ、
天晴信永討手あわせよ向むかへし、彈正だんじょうがさいごの道連みちとれ、汝等かれつて只今めいど
の供せよといろりよしかけし種たねか島しまどつと響ひび、二人は心得身を開ひらけべ、目充まこり、それで松か枝まつえよあたりを見廻まわし、命冥加めいがなやつばらと、拔ぬけたる刀ぐつと突立つ、腹十文字はらじゅうじよかき切きて、五臟ごう六腑ろくぶを擗出つかみえ、生なまかはり死しよかひり、信永ひんえいよ此鬱憤晴うつぶんぱらさいでおこふかと、よろめきあがら立上りたつ、
返すれ返す、火ひ火ひ火ひ土つち土つち五行ごぎやうよかへす、是も又、我血肉けつにくの此臍はぞの緒を伴だが
阿國あくによおる連つら、五體骨身だいよこたよふぞと、老の歯はきよ噉かみゑめくく、燃も

立猛火のいよりの中、飛込死るハ大伽藍の、大佛殿を焼たりし其佛、罰ぞ
恐ろしき、蘭丸かけ寄首打落し、臺様の爲よハ敵の松永討たハ互よ主
君へ云譯、敵ながらも志貴の城主此采配諸共ム持歸り、首實檢濟迄ハ
疎ム成がたしと首を衣服ムつゝしむも物ム馴たる武智が采配、蘭丸も
凱陣の悦び有悲しみハ、有情非情の松永が殘黨原主君の敵と追取マク
アシほらし有材錢鬼刀次手ム撫切と當るを幸ひ薙立く右往左往
ム切立れば叶ハぬ赦せと逃まよふ遁さじやらじと切立られ手並ム乙
リて寄付武士傍ムなきぞ心地よしよしめし引の大和路や、志貴ム卽立
松永を討取手柄ハ武智の智謀、武ハ芳き蘭丸が外ム類ト蘭の、より乱し
たる角前髪、勇みいさんで立歸る、矢たけ心の梓弓、武名を四海ム光秀ハ
安土の城へと「急ぎ行」

近江路の日本又四つの國司實帝京隣して居ながら守護と湖の氣色を爰々信永公安土の城々櫛籠る殊更けふに三法師丸の誕生日小田の家の孫君と持はやしたる臺の物あらべ立たる紅葉の間信忠の北の方松浦の前三法師も傍々機嫌なしめならざりし音なふ襖しとやか又真柴大領久吉が女房くればたづさへ来る破魔弓の征矢差かざす松と梅續て武智光秀が妻の五月もおどらじと壽祝ふ白木の臺蓬萊山又鶴龜の千萬年の御壽命を祝ひましてと指出す松浦の方嬉しげよ若を祝して夫よ心の付た送り物わけて二人の志厚き心を塗ごめ藤雲又羽を伸舞鶴の千年を延る此二品レちやつと禮をいやいのと子よの目のない親心愛よ愛持二人の女房夫夫が留主といひ不調法成女の指出ふ目よとまつて今のお詞有難ふ存ますと辨舌さつぱり濁なき一二争ふほ家老の妻としられて奥床し一間の障子押開かせ城之助信忠自身

提たる鏡子鍋、片手よとさん盃もやつぱり酒の機嫌顔、是へく眞柴武智の内室、いつ見ても美しい女房盛を捨てて、久吉は播磨の國、毛利元就を討手の役、武智ハ都松永を誅伐せよと親仁の差圖、いやといはれぬ主命故、嘸そち達も夜の床、お淋しからふと存るから、持て參つた此一品今迄奥で窮屈な、親子の酒盛こり果た、是から爰でわつぱりと、酒とと有けれど、松浦は氣の毒顔、是は又例の酒機嫌、や我夫、三法師丸の誕生を家老中から祝ひの進物、此はま弓や蓬萊は、二人からの志と、皆迄聞ず知るるく、其誕生を悦びの酒は愁を拂ふといへば、先盃と一つ請肴より何事のはま焼あらぬはま弓い、眞柴の手際添し、さらば爰らで武智の内儀名さへ五月の時、あん鶴の吸物天晴と譽て納る蓬萊山、この冥加なき仕合、くれば様へ近頃慮外、あのおつ志やる事へいなど、少受たる盃を是へくと信忠の詞よはつと恐れ入、是へあんまタ憚りとい

れさぬ酒の一徳と、又引受てほし給ひ、たまらぬく。ソヤ女共、そち達も用
れない、三法師を連て奥へ行早く。サ是からば不禮講、さつきもくれ
はも打窓ぎ、互々夫々馴初し、昔語りが所望く。、サ我夫、ソヤお前何おつ
亥やる、わの衆の手前も厭ず、ちとお嗜なされませ、イヤのみ呵らせ給ふ
な、かくヤ某堅い顔して居る者程得て色深い、海山越軍をするも樂し
み半分、定て大領久吉も、今頃ハ播州でよい女と引組で面白い夜軍をす
るで有ふと焚付れば、若やと思ふ心の迷ひ、サ忠信様、夫久吉が攻よ行れ
し所よも、今おつ亥やつた色所が、有共く、先一番、室の津の室、花咲
太夫天神、打連引連、揚屋の座敷、たいこ末社がはやし立、氣もはりま漏ち
とせふる、松を太夫の根元根本、いかな武士でも現ぬかして、隠す大事も
明石がた、島隠れ行舟軍、又及びなき都の地、櫻光秀も鎧の紐とく間違し
と揚屋入ゆかりの絹、からまされ、かわるまいぞも、勝鬨の聲亥のいめ

と告渡る。敵も味方も床の内ほんよたはひは有まいと、聞度ごとみさつ
きが胸夫が身の上とやかくと案じは同くれはが思ひ、松浦夫と汲取て、
ヨレ氣づかいな事はない、ありや我夫の戯事必氣よかけて下さんなど、跡
から詫る女房の誠、こなたは猶も回らぬ舌我等一生嘘いつかぬ證據
れ則城之助息次又最一つと引受く我ながら押へて下み沖の石、か
わく間もなき袖袂酒又浸する計也、當番の侍罷出都の討手武智十兵衛
光秀殿、蘭丸殿も諸共よ只今是へと訴れば、よくぞしらせし早通せ、さつ
きくればも次へ立ちや、舅様へは自らが歸りの趣告知さん、信忠様よ
も先ふ入と、いへば答もとろく目、何武智殿がお歸りとや、は内證より
先安堵隨分と駆走召れ、我等もいかふ松浦殿、奥で睡眠仕らふと、酒が
いはするざれ言ふ、笑ひを含女同士ゑしやくこぼして入みける、命を的
みかけとなき忠義を胸よ森蘭丸暫は足を都の地踏堅めたる松永を、一

時々討取立歸る武智十兵衛光秀、弓手と首桶めて又采配かいこんでは前近くも入来る都の便松永が子細いかよと信永公、一間の内を出給へば、光秀は志づくと家來も持せし三方よ、首の器を取乗て采配共よに前よ直し遙さがつて扣へ居るいかみ蘭丸、光秀が持參の器、敵松永が首成るかいかよく、仰の通君の執權彈正久秀、扶持を頭よ戴ながら、舊恩を忘し逆意の段よ、某本作と成て入込頬見しらぬを幸ひ海老名の八郎と改名し、家來と成て窺ふ所、主君を恨奉る極悪人の彈正が首篤とひ披見下さるべしと、蓋追取て指寄せば、つくと打詠老さらばふたるさまをして、我威勢をくぢかんなどし、言語道斷よつくりいやつ、討取たる其座のもやう、語れ聞んとは謊有、蘭丸はつと頭をさげさんひ彈正が、館の構へ城郭よ、負すおどらぬ花麗の粧ひ、其身の奢り十分よ、老の入まい花よ敷或ひ茶の湯碁の會と名付寄たる多勢の備へ、時日を移さば

我君の猶も大事と工の底抜つゝ打明し、我本名よばしもの彈正、叶ひじとや思ひけん、一味徒黨の連判狀、煙みなせど惡事の炎折こそよしと廣庭の立木を目充み兼ての用意、狼煙を相圖み武智光秀、どつと寄たる勢み怒の頬骨あらへ、數頭の逆立、銀の鉤を植たるごとくみて無念の眼み血をそしき、腹へ突込間もなく、首打落し勝鬨の聲を上ど誰有て討て出んず者もなく、事納りしとは、乍ら、納らぬは千本の姫様、彈正が工よ落入る勘當の身とならせ、奥方臺の前様よも、則其日よも生害と聞て驚く大將、信忠夫婦も走出何故母の最期と尋ふ蘭丸打亥はれ、元の發ひふ姫様、桃山に見物の其折から、器量勝し町家の忤を細川の一子と名付、艶色よ迷ひ給ひ、お契り淺からぬ果は身の難義と成、いたいし乍らもは勘當、奥様は又我君へ云譯立ざる覺悟といひせも果すだまれ蘭丸、左様の事もあらんと思ひ、先達てより其方を付置しかいもな

く臺たてがさいご姫が身の上、己おのれが思慮の薄きを事おこる、左程仕込し工の底、見貫ぬ�もせぬ狼狽、眼、目先計の忠義立、現在敵の館やかたよりおいて、臺の前が死べき命助いのちすけふとする所存もなく、見殺しよせしうぬが不忠、手てに出さね共主殺しも同事、今信永が手討うそりみするやつなれど、眼前敵を討取たる功いとこめんじ、七生迄の勘當かんとうが、早く立てさせわれど、きめ付られて蘭丸らんまるも、誤り入たる大前髪座だいぜんぱくざをひねらぬ計也、信永かねね重うへて、ア、信忠のぶただ今聞通の品なれば捨置すてきれぬ姫が身の上、其方は松浦伴まつうらともひ、一時も早く都とよ登のぼり、有家ありいえを求告むねづけらせ、松永一味のやつ有あべ、見付次第じずだいよ討うそりて捨すて、時ときを移すな早行ゆけど、詞ことわ尖とがき父おやぢが命、信忠のぶただはつと手てをつかへ、蘭丸らんまるが誤あやまり故いきばに憤きるり去事あきまつながら、誤あやまて改かる又憚はづかり多き此場しじょうの時宜しげ、又もや都とへ連れ歸かり、勘氣かんきの願ねがひ又重うへて蘭丸來れど信忠のぶただの、詞ことわ背そむかばに勘氣かんき又鉛なわやおりんど立上たつあり、一先出だいせんしゆる館やかたの名残なごり、さやけき空そらの月影つきかげも隠かくすや、森もりの蘭丸らんまるが胸むねは七しち重じゆうの門外もんがいへ、せひもなく

なく出て行、やし有て信永公、ヤマレ光秀、汝よ問べき一つの不審かしる野心と
の松永が首、何ぞや名有名將の首實じゆげん檢ひきみ等しき仕方、我目通共憚おののらす何
故三方より乘のせたるぞ、其譯いかゞと仰有、アこゝ仰共存せず、尤君の爲よ
ハ敵す共、天晴ゆし敷松永彈正、齡七十よほど及よしでも、惡事よろい組くみせし餘類よるいの武
士一人を召出さず、其身一人が腹切て、相果たる其有様、君きみゆがまぬほ
政道せいどうと我わは存そんずれ共、恨うらを含ふく松永まつや無道むどうの君きみと思おもひ詰づめ玄くろいせんとせ
し心こころの丈夫ぢやうぶ異國いろくにの般ひんの湯王とうおうハ夏かの桀王けつおうを討とう周しゅうの武王ぶおうハ般ひんの紂王ちうおうを亡ぼほ
せし例たとひ己おのれが魂たまし有あば敵てきながらも彈正久秀だいぜいくしゆかしる大望だいぼうを思おもひ立たて武士の
身みよき手本てほん殊こと又首實じゆげん檢ひきよひ定さだりし法ほうの有物あむつと存そんずるから、かく
計はからひし武智光秀ぶぢこうしゆは批判ひはんあらば承うけへらんと憶おもする色いろあく言い上あがす、イナソリ
や誠有武士の事じよ況なほや松永女童わらべを欺だますつて、信永しんえい難義なんぎをかけ國家こっかを望のぞむ
は跡先見あきへ明盲あき眼まなこ、又一つよひ此采配さざなはよて松永まつやを、誠の武士でないと

いふ、証據の一つよつと聞物じて大將たる身の采配といつぱぬるでの
木を以て作り、双方合せし其中より我姓名を書記持あつかうが是采配古
實を玄らざるさまをして謀叛呼り片腹いたし去ながら箇様の事を
知る者ならべかしる最期も遂まじきよ知ざるも理首よ成てよ我目通、
憚えらぬ武智光秀、汝も主の恩を忘れ、松永を賞美する心から、臺の前が
最期をば、余所よなせしも理りく、我目通ひ今日限り、人間ならぬ彈正
が首見るも中よ忌いしと扇子追取てうくく打ば響と光秀が傍へば
つしと蹈飛しけけ入んど玄給ふ所立出る武智が妻先暫くと抑止め夫
の不骨の日比の癖、奥方のほさいごを、お助たすけやさぬ不調法てうほう、ほ怒は去事いかり
がら、ほ恩を給はる主君の目通叶かなぬどいふ情ないアレほらう玄ませ、身
の誤りを省て返答もなき光秀が大事のくふ主様お主様そで致そふ様も
なし、物いわれぬが証詞あて前ヨレ光秀殿おおせ眞まことて計居ず共我君様へ只一言ふ

詫言をと半分いへせすだまれ女房、人も頼まぬ詫言呼へり、主君の主君
の位有り、我も家來の器量を以て返答せざる武智光秀、何を已が小指出
た、扣へておれと睨付れば、「なんば睨しやんしても、そぞやふ前一途
の了簡ひらみ詫をといふ間なく、光秀怒の聲あらしげ、夫も背く人非人、
縁は是迄隙くれたど、聞もあらせず夫の傍重次郎といふ子迄なした夫
婦中、何誤り何の科で縁を切とい、洞欲なふ主よ詫をさしやんせと教た
が誤か譯を聞いて下さんせと取付歎をあらけなく、取て突退物いへぬ
夫の心底いかゞと案じ重るさつきが思ひに大將も氣色を損、玄科な
き女房よ暇をやるも此信永よ頬當同然ヤア、誰か有、武智十兵衛光秀を
門外へ引出せと、呼へり立給ふ、裾を玄バシと扣るさつき、心強もふ
りはらひ帳臺深く入給ふ、何思ひけん光秀、轉落たる松永が首を器よ
取納、玄づく其場を立上る、コレ待てと女房が、取付するをふり放し、縁

切た其方又、詞かはすも無益のさだ、武智が去状見てふけど、又取出す采配を、暇の印と投やれど、其儘拾ひとつくりと見、松永彈正久秀と、此内より記せしからひ、尋よ及ぬ誠の采配、取かへ置たる其子細、今打明ぬが他人向、夫婦の縁も其柄ゑよ等し、合せし物の離はるる道理、其片かた破われの我手わ有、夫逆も又志つくりと、合時よ元の夫婦先それ迄まで離はなれよ、さつきさらばと見廻すこなた、信永武智が顔と顔はたど、立切夫婦の縁時ときよ近江や、あふぎの別れ別れて、こそり「行末の

○第五

亂既ちんよ極までる時の治ちも亦既ちんよ極までるどや、内大臣平の朝臣信永公、四夷八荒を切從したがへ猶も中國平均せんと、洛陽本能寺のうじやうよ出陣あれ有べ、五岳八山の寺院々上洛じょうらくの賀がを祝しゆくす、使僧しそうハ引ひもきらめく獻上けんじょうのはを引ひごとくよて、門前市もんぜいをなしみける、本國寺の妙典義端むうでん智恩院ぢおんいんの俊了しゅんりょう知明みづめい、いづれも勝手かつて

取持^{おもふ}退屈^{おもふ}したる坊主^{おたか}天窓^{あまぐら}、ふり立庫裏^{よろひのへ}より寄集り^{よどがみ}、板暑^{いたか}いに、此極暑^{ききじょ}より何が大釜^{おほなべ}を焚立るよよつて、こたへられる物で^ひなひ、法花寺で^ひなふて、立つかい阿鼻^{あび}焦熱^{さうねつ}の地獄^{じごく}同前^{どうぜん}、何と俊了^{そうりょう}そうではないか、いかほもく、是を思へり我等^{われら}が寺の正真^{しん}の極樂^{ごくらく}せかいと、法花^{はな}をなぞる詞付^{ことづけ}、開てこなたみこらへぬ義端^{ぎたん}やくわいらむ無上^{むじょう}、淨土寺^{じやうどじ}を有難^{がた}がるが、どふした謂^{いわれ}で法花寺の焦熱地獄^{じやうねつぢごく}で、淨土寺の極樂^{ごくらく}じや夫^{それ}ぬかせ^{へんたう}返答^{かへ}次第赦^{ゆる}さぬと、腕^{うで}まくりして罵^{ののし}られ、俊了^{しゅんれう}が進出^{すうしゆ}、添くも淨土寺を、極樂^{ごくらく}といふ因縁^{いんねん}謂^{いわれ}て、聽聞^{きんもん}玄^{くわい}たくばいふて聞そふか、アみだ如來^{のうらい}のおひします所の何といふ所玄^{くわい}やと知て居るか、そりや知た事西方の極樂淨土^{じやうど}、其極樂を淨土といふよよつて、淨土宗の寺を極樂せかいといふが誤り^{あやまち}かど、いはれてさつちり義端^{ぎたん}が閉口^{ひぐち}、妙典頭^{めうてんとう}打ふつて、某義端^{もしぎたん}より成かへり一問答^{もんとう}仕らん、汝^な等^ら愚痴文盲^{ぐちぶんめい}の身を以て、忝くも祖師^{そし}日蓮^{れん}大上人の弘給^{ひきゅう}ひし、法花宗

を識モジリさみするか、淨土のみだと、法花のみだと、一體一體か別体か夫いかよ、
いふよや及ぶみだはいづれも皆一体、一たいならば八宗九宗すべて極
樂、何ぞ淨土寺計極樂といひんや、アどうじやと賣付セムツフられ、ぐつ共すつ共
澁楠シヌカシの尻ヒリ込ミムてぞ詰り居る、義端圖イチヅク又乘スル、何ときついか返答ヘンタツ有まい、是から
又愚僧イフサムが一不審持ヒツシナシテて參らふ、其ぎつちりと咽のぶみ詰ツクつたので思ひ出ハシメた餅ハモ、何じや餅ハモ、これやおか志ハシメ、さらば返答ヘンタツ仕らふ、餅ハモはく
ふ也、くふとの何を以テて砂糖豆サトウの粉付フクわぶり、是を以テてくふ也、酒サケはいか
ス、是呑也、呑スル何を以テて鰻玉子泥龜汁ウツボヅラヅラ、是を以テて呑也、扱ハシマ汝破戒ハシマハルの僧
か、此返答ヘンタツ又行ハシメくれて、たゞすみ給ふハシマ扱ハシマいかよ、夫こそい、西明寺殿雪
の段、然らば巨燧ヒタツ又轉寐ウタツムは、八百屋のふ七懸シナガハの緋櫻ヒザクラ、金カネがほ志ハシメいか扱ハシマか
よ、夫こそひらがな盛衰記セイサイキ、然らば狐キツネの忠信チョンシン、義經千本櫻ヒザクラかい、そんなら
忠臣カラシシヤウ講釋カクシキは、とし様呼ハシメんでと泣ハシメわいな、泣ハシメはめいとの鳥トリかへ、ペこべんく

それくやひとせい南無あいだくく妙法蓮花經くなまいたく
妙法蓮花經なまいたく宗論やら踊やらたいいやくたいなき折から
信永公の成と呼ひる聲よ悔りはいもう我一と方丈さして逃て行程
なく大將信永公饗應の酒宴よほろ醉機嫌の醉ざましは傍小姓よ傳
れ端近く出給へば當寺の住職玄興上人よつきの箱植は弟子よ持せは
目通よ直させ置遙こなたよ手をつかへ極暑の砌見苦しき愚僧が館へ
移入られ下さる段當寺の面目此上やしへき何がなほ慰と存咲後
の此花は上覽よ備へ奉ると謹で述らるれば信永は機嫌なほめならず
我宿陣の無心の上何か上人の心遣ひ殊よ時ならぬ珍花誠よ武威を
咲する前表一入過分の至り成と花よ機嫌よき折どすり寄て頭を下
家臣武智十兵衛何とやら機嫌よ違ひ此度の出陣は供よも俱せ
られぬ由愚僧を以てお詫のお願ひは聞届け下さらば君のお情愚僧が

本懷、希ひ奉ると、思ひ入てぞ願るれば、信永もやゝ默然としておれせし
が、愚臣武智光秀、聊心^{うりこころ}と違ふ旨有、目通を遠ざけしよ、出陣を願ふといふ彌
以て不敵やつ、取上るゝ及べぬ共、切角上人の心遣無下みせんも本意あ
らねば、對面は赦すべしと仰みはつと座を立て、供は叶はず共に目見
への恵免許^{めんきょ}、や聞せて悦べせんと、出家侍隔なき前を「立て入みける、や
や有て武智光秀、日頃の強氣も主命^{たか}も違へばおのづと身すぼらしく、
座の間隔平伏し、先以てうるいしきに尊顔^{そんがん}を拜し奉り、恐悦至極と相述
れば、大將遙^{はるか}より見やを給ひ、珍しに武智光秀、此信永が志あき体汝^{おの}が心
よ悦べしきや、こひ仰共存せず、君^{きみ}たれど臣たらぬ不忠の某、
し其日^{その日}、只^{ただ}安泰^{やすわい}をのみ希^{こねが}す、いか様是^{ひさまよ}さもわらん、犬猫^{いぬねこ}でさへ其主
の恩を知り、尾をふつて志なだれそべへる、汝^{おの}も尾があらげふるべき
よ、あつたら武士^{士官}も尾がなよて殘念と心とけざる大將の、仰み猶も身を

ひれ伏^{國代}暨^夫と成共猫と成共思召^怒を静^{じやう}られ、此度の^は出陣^は供^ふ加^ふ
下さらば生^う世^よの^は厚恩偏^{かわいひ}願^ひ奉^るど^いへ其不^興の^は顔^ばせ
此信永^が戰場^よ向^ひんよ、犬猫を何かせん、太平の刻^{きざみ}麿野^よ出なば其
時汝^を召^{連れ}んと、飽迄^{まくまで}嘲^{あざ}しに座^を立^んとし給^へべ、立寄^て義^をす
がり、臺^の前様^は生^害また、其上^よ千本様^{行衛}なふ成給^ふ迄^{たま}助^{たすけ}奉^{らざ}る
は憤^{ひきまほり}去事^{ながら}前^{以て}は斷^{ことわり}ヤ^{とく}、其座^よあらねバ力及^すわ^りな
きいもせ、は寵愛^{ちやうあい}の千本様^よ別^れさせ給^ふ故^か餘^りと^ヤせ^ばは聞^か分^も
なき行跡^{おもろきひ}阿斗^を街^よ投^げ捨^し劉^{玄德}が功^が少^{しづ}ならばせ給^へや^と、い
はせも果^すはつたと睨^{くわん}付^ヤ緩^{ゆる}怠^{なま}成^るヤ條^{じょう}、妻子^を捨て忠臣^を愛^{する}事
僻^{ひき}如^きよならおふか、我^よ劉備^が徳^ハ有^共、唐土第一の忠臣^よ己^をくら
ぶる慮外者^{りよぐわいしゃ}、見るも中^よ穢^{けが}の玄^とはつたと蹴^けすへ有^あふさつきの枝^か
なぐり、りうくはつじと打^すへ給^へべ武智^は猶^も身^を惜^まずぶたれ

ても踏ふみれても身みよ取とて誤まちりなければちつ共とも厭うらす、耻はずしからず、といひへ
餘り無法むはの打擲うちぢやく、ア無法むはとは我われをさみする重きわいの不敵者ふてきしゃと、又打かしる
さつきの枝えだ、しつかととらへ花打守はなうちしゆ、時ときに今天が下おちしるさつきかな、信
長耳おとなみみをそべ立てだて、アあやしや、正ただしらあの音ねへ寄太鼓いたこ、貝鐘かいがねといひ物騒さわぎし
きり、誰だれか有遠見あるとみせよ早くくとせき給たまへバ、アお騒さわぎ有なほ大將だいじょう、遠見とおみ
及およぬあの物音ものね謀叛ぼんばんの輩たぐい、此館こかんへ寄來よせる貝鐘太鼓いたこ、謀叛人ぼんばんじんとはそりや
何者なんざ、キ外迄ほかもなく、其謀叛人ぼんばんじんの大將だいじょう、斯かア武智十兵衛光秀、最前まへより無念
をこたへこなたの儘まつみ成なつて居たば、まづ斯かなさん我計略けいりやく、ア騒さわぎすと腹召はらめさ
れ、光秀是はて見分せんすと始はじみ似おなぬ、不敵の有様大將驚おどろく氣色けいせきもな
く、主おもよ背そむく人ひと非ひ人ひと、謀叛ぼんばんをなす共とも何程なんじゆの事ことわらん、ア馳向はせてぼつちらせ、
者もの共とも早くの詞ことの下げ承うけりるとかけ出だるは知明妙典俊了義端手たらんてんよ弓ゆきと
矢押やおきつがひ、矢やふすま作つくつて信永しんえいを追取卷おとしめまき、我われよい武智ぶぢが郎ら等ら斯かの如ごとく

姿をかへ此寺へとくと入込汝が家來の殘らずこつちの味方よ招き背
くへ一と討取たれバ一本立の信永殿遁れぬ所玄や覺悟くと聲く
よ呼はれべ遠の大將鞠果只忙然たる折こそ有武智が家來山熊太郎注
進と呼へつて廣庭よ大思つぎされば味方の惣軍勢羽林信忠の在城二
條新御所の館へひたくと押寄無二無三よ攻立れべ不意の軍よ敵ひ
はいもふ太刀よ刀よ馬物の具と狼狽さゞぐ其中よも森の蘭丸一番よ
討て出軍の不意を討れたれべ所詮叶ひぬ味方の運かくる時節よ死せ
すんば君恩いかで報すべき命おしまず防やつゝけと只一人の下知よ
よつて諸軍の心引立られ討共射れ共厭ひこそ義を金鉄と戰へば味
方多く討死し攻あぐんで見へたる所よ大將惟任左馬之助究竟の射手
をすぐり近衛殿の屋敷の屋根へ馳登せ新御所を遙よ見下し、さがり拳
よ差詰引詰さんドと射て下す矢先は篠つく雨あられ防がんよ術な

ぐ館やかた又火をかけ煙けむりの内うち又残らず討死仕る、大將信忠此体を見るも、いかで遁れん潔きよく腹切ん去さるても我死骸しがい敵がいへいかで渡すべきと指添腹さしざなよがへと突立炎ほのまきの中なかへ飛込ひこで空からしく亡ぼはるびしへば味方十分勝軍まさかうぐんされ共大將信忠の一子三法師、其場そのば方行むか方知しれず剩家臣森蘭丸、小田家の重寶二引ひきの旗はたを取隱かくえ、一方を切破きりり落延おちのびてひへ共追おと追手おとをかけたれ、早速討取とうしゆすべし、心安あんく思召しよめと息次あへず訴うつたれ、光秀みつるが笑わらの眉まゆ開ひらくる運うんと傾運命かたうみやうめい授成行じゆじゆぎやうし口惜くち惜やと猛たけきに目めよ血けの涙拳なづきを握にぎる大將のほ有様さまぞいたへしきき、我ながら不覺かく也、逆そなへも遣おとぬ此圍潔きよく切腹きりはらせんと宣のなまふ聲こゑと諸共よしら佩腹はかせ又突立とつだいどつかと座くわして聲こゑふるはし、ヤいか又光秀みつる儕わがれなれば先祖せんその苗字なまこを我身わがみ又土岐ときの今いま天あめが下した知しと云いかけし、松永まつなが

謀叛を繼、今ぞ天下を知るといふ句の心違へあらざと名將の未前を悟
る、詞よ光秀打黙き、遺い信永よき推量、詞の如く彈正へ我爲よ實父な
れ共、親共子共互よ玄らず過行年、松永が謀叛の聞へ討手は則森蘭丸此
光秀兩人館へ馳向ひ、有無をいいせす彈正よ、まつ其如く詰腹切せし其
折から、松永がさいごの一匁、我よ一人の男子有稚時よ別れしが、又逢時
の親子の印と貯へ置し此采配、今は仇なれ何かせんと、投捨るを取上見
れべ放れし柄の内よ書記たハ松永が、家の系圖我身の上よ覺有手跡と
云月日迄寸分違ぬ割符の采配、是を所持する彈正ハ認こそ我が父也
と思へど叶ひぬ深手の今端、其時親子の名乗をせぬ、切角思ひ立れし
謀叛、我受繼で修羅の妄執晴させん其爲よ、無念を餘所よ首取持實檢よ
備へし時、無法無体よ打擲したる彈正の首、今改て見參せんと、取出し
たる巾紗物披が内に玄やれかうべ魂の冥途へ赴共魄の殘て其時の父

が無念と我無念ひらくさつきの時ハ、天アマニが下シタる光秀ヒカルが恨ミツメをどくど
覺ハラカよと、觸體ハラカを以て丁ハタハタと打てかへたる武智ムチが謀叛ハサシテねざしは、斯ハシと、玄
られけり、信永無念の歯ハを喰ハムえめ、かゝる不忠の者共ハシタらす、年月扶持ハサシテせ
し明盲眼アキヒヂ、我のみならず信忠迄ハシタ、俱ハシタ家來ハシタ誅ハサシテせらるハシタ、弓矢神ヒヅチノミコトも見
放ハサシテされしか、是ハシタ非ハシタもなや口惜ハシタやと怒ハシタと俱ハシタ、劍ハサシも尖ハサシき大將ハシタの最
期ハシタの程ハシタぞゆハシタしけれ、直ハシタみに首ハシタ打落ハサシテせば、光秀勇ハシタんで出ハシタかしハシタ、信永
父子ハシタを討取ハサシテば、誰憚ハシタらぬ四海ハシタの主ハシタ、いで裝束ハサシテを改めんと、詞ハシタの内ハシタ持ハシタ出ハシタて
傳手ハシタみ着ハシタする素袍ハサシテ袴ハサシテ古寶ハサシテを爰ハシタみ立烏帽子ハサシテ、花やかハサシテ粧ハサシテひ立ハサシテ山熊行衛ハサシテ
知ハシタざる三法師丸草ハサシテを分ハシタつて尋ハシタ出し、敵の末ハシタ根ハサシテを斷ハサシテて葉ハサシテを枯ハサシテせよ、我ハシタ
是ハシタ禁ハシタ中ハシタへ參ハシタ内ハシタし、將軍宣ハシタ下ハシタの綸旨ハサシテを乞受ハシタ、一天四海ハシタを治ハシタん事ハシタ、我方寸ハシタの
内ハシタ又有馬引ハサシテと呼ハシタつて廣様ハサシテよつハシタ立上ハシタれば、はつと山熊かけ入ハシタて引出ハシタし
たる連錢足毛ハサシテ庭上ハサシテよ引居ハシタれば、様ハサシテひらりと乘移ハシタり、手綱ハサシテたゞつて大音

上、遠からん者の音も聞、近からん者の目も見よ、鬼神と呼れたる内大臣信永を武智光秀討取たり、いづれも凱陣、と呼へる聲や鬨の聲山も崩る」「計なり

○第六

羅袖の火熨を廻らすよ追非すと唐人の例彈三味泉州よ情寄くる堺の津新み建し色里の大門口の高札よ廓の内は侍も醫者も乘打叶すと堅禁制傾城の花の見次第折次第武士町人の分ちなく伊達を筑紫の客迄も帆掛て戀の港なり、二階座敷よ客を待つ半蔀逢夜新造の里の鷺初音から人馴て氣の通り筋アレく小坊主供よ風俗の粹らしけれどどこやらみ角の取れぬの元服上り、是二番目のよい男ドリよつと目鏡お借いあま、まんがちなソレへあひ草履、どこらで有ふ田舎衆か、京か難波のよしあしも白髪まろめた里通ひ粹の是じやといふ間もなく、大門通れば門

番が^御待た親仁様^{制札}が目^見へませぬか此新廓^{くるわ}の格式初對面^{じよたいめん}の方^はいどあたでも刃物^{ひのもの}をこつちへ預ります、^さ成程^{しゆうせい}、心^がせいで見へなんだ、そんなら此一腰渡す代^ふお手前^{まへ}に頼^が有^る、何^とけふ一日其門番^の役目^を、おれ^も勤^{はつ}さしてたもらぬか、^うお前^{まへ}がや^{ハチ}物好^{ものすき}な親仁様^の扱^い女郎^を金出^さす^み、揚^{あげ}て見る始末^{しもく}じやな、^やくそんな事で^いない、おりや小西如清^{きよせい}といふて此埠^の木薬屋^{子細}有^て勘當^{した}憲^{けん}、此比聞^は此新廓^へ毎日入込^{といふ}噂^{うわさ}殊^よ々憚^{むづか}と様子^の有^た女中^も、爰^で傾城^{けいじやう}よなられた由[、]若又爰^でどれ合^ては、あいつが命^{みこと}かしる事[、]元^ハ養子^也、本^の親^{への}義理^を思^ふて、何^やかや氣^がしりけふ見付^{たら}連^{つれ}ていん^で性根^の付程^{異見}がしたる、よい年^亥て此様^な色町^へ來^るも子^が可愛^いさ、^どふぞこなた^の其鉢^{はち}卷^{きき}や棒^{ぼう}を貸^かして門番^勤さして下^され、雇賃^{ひさん}いこなた^よ進^{しん}せう、頼^くの深切^{しんせき}み、^やもふ此炎天^{ゑんてん}、一日つきすわつて居^る事[、]こつちもいやでな

らぬ事、そんあら番の此裝束、小宿で仕立て上げませう。サクニ、こちへと伴へ
れお世話くと夕日影指かけ日がさ、天が下、人の司の君なれど定めな
き世の行末、水の流の、君と成、眉の八字や八字、跡よ刀の差ふりも、は
でを捨たる浪人の、あみ笠まぶかよお傾城暫くと扣る袖の振返り御留
遊ばす方様は、人イモトがましく名をなのるも、頬耻しき浪人者、咲亂れたる
花のお姿、雨を含し空の氣色、今ふりこんも計れず、馴よしけれどかさの
也無心、長柄おがなの不調法ながら、拙者が指かけに同道どうとうやませう。是へく勿
体ない一河の流、自みづから遊女の賤い身よ、お刀の手前そりや彈り、遊女と
ハ由なし言、秦の始皇の雨やどり、松の位の松かけよ、露の情の芳志はるしよ
預りたい、夏の空と云乍ら、まだふりもこぬ中空よ、心有げなかさの
やどり、此かさうのまあその、かし編笠の心の奥、打明あけて見たいわいな
實じだ、尤、空はれ晴ても此方こちら、戀うら心の晴ぬ思ひ、晴すの君がお心次第、ふる

かふらぬの寝間の下紐とつくりとお目とかしりたい、其のお返事に、今
れどふもやされぬ、何事も、後へと笑を残して奥座敷別れて入や西
の海戀よやつるゝ思ひがなくば、なんの浮世の住吉様へ、詣廊の居つゝ
け客瓦石大臣、ほ祓ぞ夏の印の挑燈法師が三昧線中居がたいこの千鳥
足、ヨイく醉さまゝ風よおくられ歸りくる、二階をとんく新造女郎、よふお
歸りと出迎へば、おさまゝ廻らぬ巻舌みて、半蔀様逢夜様、けさ程より久
よおめもじやさんだな、今日の大切なお客様の上意よつて、住吉
明神様の内方へ呑み参じて、近頃の面白さ、大將様も私様も、機嫌甚う
るわしうて、皆よ悦べしう存奉るで、あいかいなほん様、やもふふさま
女郎の道でのじやうだん、此城すめも近頃よわり奉る、假令われが白い
目で見て居りやこそ海へもはまらぬ、こな様ふれがあけりや、目明の杖
失ふた様な物じや、そふじやござりませぬか、旦那、何ぬかすやら中居め

よ酒くらはすと、わいつが客よ成て、客がたいこ持て、遊ばしてやる同前
さ、何とおつしやる、私をお前が遊ばしてやる先以て忝い、そんあら私は
大臣、法師様のねしが杖玄やな、杖よ手をひけ、たいこのめんく、皆こふ
か出と打連て、上る様側つゝがまち意路くね悪き、高なめ大臣、といつ
を見ても伏見人形見る様な、ぱりのない女郎共、身が望む大夫の司一人、
物體付ても高が賣物、金銀で頬はるみぐつ共云分ない筈なれど、惚たが
因果無体みり抱て寐ぬ、眞實で逢て貰たざ、ヨリおさまいつ抱てねさすの
玄や、よいねいな、そこを取持此おはま、つい出來よくい所が戀遊君よ
の猶道が有、江口の白女(しろめ)の延喜(えんぎ)の帝(みこと)と懸せられ、させ川の龜菊(かめぎく)の後鳥羽(ごとうのは)院
院み受出され、國郡の主よも成た玄やないかいな、禁裏様からほ救され
た此廊(くらわ)つい傾城(きかう)とさげしむ心の有お客り、ふり付るが里のならひ、心底
さへ届たれば、自由よ成も傾城、譚ながら氣をせかずと、私よ任して置給

へと、弱みを見せぬも酒の徳、一本さしれて佛頂頬、二人の女郎も能氣味
と目引三味引座頭が玄やら聲何ぼいんつう澤山でもひがさへもんこ
ちやすかん論へない^三置ふろ面白くもない小歌ゑいかと思ふて乞食
聲の玄み座頭め下手三味線聞たくないと叱られて手の置所、なむ三味
機嫌^{きげん}破皮^{ぱひ}よしよさん玄ろり取置^{とり}てやそふ色^{いろ}ふこりなされた瘡癬^{ぼうせん}を
もみ和らげるが私得物^{わたくしもの}と、よくぢり機嫌の取直し^{なす}こたへますかへ、玄
たい司様^{じさんよう}が無分別でござります、お前の様^{よう}あよい殿^{てん}はが唐^{から}よも有ふが、
ばつとりとして玄やんとして、鼻^{はな}高からず低からず、色黒からず白から
ず、やかましい人の顔^{がほ}のぶんさん、おれが顔^{がほ}がどんなやらうぬが其目
でいつ見さつた^サ夫^{おとこ}へたつたいま貰^{もら}ふたお目玉でまだぬかす、なんぼ
高上^{たかの}上^{あが}りでも、客の爲^{ため}おのいらひ家來^{いわ}いやとい云れまい、何のと
ひつでも金見せたら自由^{じゆゆ}よならいでよい物^{もの}か、ニヤ女郎共^{かわらわ}共^{とも}金が波し

くべ取せうか、わたしは芥子人形がほし、馬鹿な子悴、ヨリヤおなま、逆の醉次手、此七合入でぶち殺、一ぱいが百兩充、チア食らへと投出す、ア、大將様の仰じや物くらはいで何と致そ、一つ次野主もしよござりますか、諸事ぐつと呑込だぞヘ、お肴の此山吹、何とこふ玄よ玄や有まいか此百兩を土器投のかわり、向ふの海へべらきく山吹あが玄ひどふ有ふ、ヨリヤよからふと騒立、ア、女郎様方そそや餘り勿体ない、レお盃一つ次だり、此存知の城すめなれど、百両できゆつとおわい、ホシそふ玄やそんなら手元で又百兩、そふへならぬぞ、おさまより外、は呑さぬ、うぬが金せしめふで、慾頬のはるあのつかみめが、摠共く夫であんまがしよざい、かや、ヨリヤ出かしおつた、水かき出せ、ヤ水かきと、鶴さばきさらばくわつと、は褒美をたわけめ、うぬよこますハ手の内が相應、其爪の長さで、三味線が行ぬ筈じや、ヨリヤむごい、そんならお金は下されいで、手の筋のお改か

武士ニ二言あしと云々、扱ハあなたハ山伏様^ヤ、山伏とハ慮外者^ヲ、ナ
もふよござります、お侍の功者^{ハシ}などナ事、次手^ミハわたしが手をひらう
むて、こりや大極上天下筋^ア、天下筋^ヲ嬉しく、さらばわたしが大
事の手ではすつて上ふ^{ヨリ}爰^ミ太夫様^{さん}の伽羅^{カラ}の枕^{カタマ}、うつりと思ふてひ寐
なれど、差出せば猶^シむつと顔^面抱^{ハシム}て寐ねばごく^モも立ぬ此枕^{カタマ}、伽羅^{カラ}でも沉
でもおぞやいやじやと、土足^ミ又^ハかけて踏碎^{ハシク}く、狼籍^{カサガ}無法^モも騒ぬふさ^マ、是
ハ又きつい蚊^カで^ハ有^ス、是で^ハあなたも寝られまい、ほん^モ此伽羅幸^ナよ
い蚊^カやりと、床^ミ直せし風爐^{フウロ}の火^ミ、べる枕^{カタマ}の我からと、あまのたきさ
し、ヨリヤきつい伽羅^{カラ}の蚊^カくすべ^ハ今か^シ始^ム、ありがた過^{ハシメ}て天窓^{アタミ}がふらつく、
極樂貴^{サメ}玄^ミやと夕嵐^{アラシ}、香^ミ引れて尺八^{ヒヂハ}の音^ミも、すみくる、修行者の縁^{ハシ}ふし
を^{ハシ}や、二階^ニも身^ミ玄^ミむ笛^{カキ}の音^ミも引^{ハシメ}れ司^{ハシメ}が覗く^{ハシメ}と^{ハシメ}玄^ミらす^{ハシメ}、心^ミくさ
香^ミの音^ミ、是^ミ付ても思ひ寄^{ハシメ}、桃山^{モモヤマ}の花見^{ハナミ}の時取かれたる香包^{ハシメ}色紙^{シロ}又^ハ記^{ハシメ}

せし三十一字、思ひ餘り香の煙と諸共々、雲井又名こそ立上りけれ。其
歌へといふ顔を見上る虚無僧又惄り、扱ひ小田の姫あるかといふ聲聞
取中居が惄り、客々聞せぬ耳の穴、何といふ氣味でござりますかと
外より彌十郎割符の色紙指出せば、のふ戀人かと二階を飛も下たき、其
風情アレ、あたかしましい尺八、手の内やつてぽいになせど下よりおこる
二階アレ、アレいなす事成ませぬ、まだ何やかや聞たい、心の竹の跡がぬ
所望アラバ所望とあらばお安い事、アラバ報謝アラバ手の内アラバ全盛の司太夫殿暫
くお借りたい、アラバ人の買た揚の太夫、尺八で貰ふとは肝のよい物貰めアラバ
貸借は廓の習ひ、修行者も客じや迄アラバの客誰ぞ見知て居るか、ふさ
まく、いきついてもふ寐おつた、人アラバしらず此座頭がアラバ見しら
ぬ、アラバ今初ての大臣領城の賣物千金ならば二千金買論致して見ず
そふ、アラバ身が入て面白い、瓦石大臣が揚詰の太夫、顔見せる事もアラバならぬ

身が前より引付て置き、自が心次第、借かるらぬる器量、次第、お侍。こも僧。後
 よ逢ふ。シャン花は買たし直段の高し。こも僧のちやんないもん。ちよと逢た
 い事。玄やどなべかこふ。お出と悪口だらぐ。別れて「左右へ入よける。夏
 の夜道の早使なべ炭落る汗たらぐ。且那急用」と呼聲奥瓦石大
 臣。何事か氣遣わしい。武智様を急に用シ。誰ぞ邊より八が来るか。心を付
 よと封押切。押抜く状のはしとを油断中居が空寐入。後より目のない狼
 狐奴。且那松の枝より誰やらはつと掏り。鳥めでござります。何を馬鹿め
 がきよろくと。返書より心得た。用事へあい早歸れと。狀懷へ卷
 納め。行奥の間へ彈三味より。洩くる司が物思ひ。よるべ定めぬ舟なれや。い
 づく泊と。白浪の現。すぐる身の程。付て戀しき古郷の風のつてだよ
 息ひねの枕。花は薰れ共袖のみ濡て干兼る。さほの露。も涕。も玉の
 蒼。かけて頬つる。契りし人は。みづくせいか成報。おかれ。中居衆ち

よど頬ふと立出る彌十郎、逢たかつたと立寄司よき、太夫様おとしやう、初對面のお方
ま馴なじよまい、大事のお身よ似合あいあつぬ不行儀ふぎ、奥へと押やられ明あけてこぶ
とい今更ごくせう、云そゝくれし乱髪つんぱ、じつとこたへて入いみける、見れば美しい
こも僧様そうよん、笛の音よ妻乞鹿めいきじよの心を釣獵人様さかなりにんよん、見れば見る程ほどほんきのわ
く、悪性らしの腹はらの立たつ、風俗ふうぞくでい有あわいのの、中居なかゐ、こな様ようのかいよもな
らぬ、こも僧の風俗ふうぞくが、何で夫程腹はらが立たつ、腹はらの立子細たてこざとす。角前髪つのまへの
色盛いろよみ、かべの様ようあわしらを色いろみする氣きいと、腹はらが立たつめ、惚ほれたよよ
うて、おたが初心な小娘こむすめと色事いろごとせふる、又ちつとこんな年行としどころと相談あうだんして
見る氣きいなひかと、風かぜよもたる、柳腰やなぎこし、物越ものこしよ聞司ききが恂り、こなたの間ま
も覗うかがふ瓦石かわせき得手とくしゆへ小西こにしが摺寄すりよていかよも惚ほれて人が面白い、色いろみ成なぶが、つ
いそとひわして置おきて、跡あとで變改かんがいするのじやあいかせいか誓文せいもんく、中居なかゐの魂たましい前まへ
垂たれ冥理めいり、そつちもからぬせい文もんを見せてやいのと抱付いはり、袖そでぶり放はなし指さし

がへの尺八袋より仕込の刃目先へ指付並あらぬ中居の魂夫を見込で
お力よ成よきたこも僧の尺八、武士の魂の忘ぬ重代、一旦堺の町人よ養
子とれ成たれ共、元より緒の武家の胤、松永よ頼れたも侍よ立返りたい
望計深い様子に上から見へぬ奥床^{ゆか}しい傾城町、其企の廓の内へお拘な
されて下されしが、一旦思ひ立た武士道さなくば此儘切腹と思、ひ詰た
る面色よ、丁度手を打出かさんした、通侍と云たいがこも僧のお客贋、武
士でも初てよハ刀を預かる廓の法、大門口よ書記た色里の制札を破つて、
魂の顯いし様がまちつと早い、其淺はかで此廓へ入られぬといふ
其子細、是見やしやんせと押明る、上段の床の間よかけ地の表具古金襴^{こきんらん}
直垂姿の繪姿^{絵姿}、いふよ及ず、此廓のほ本尊様、其ほ胤のお姫様と浮名の
立たる其身の越度^{越度}、一つの功が立ぬ中は、此ほ本尊のほ慣り、お傍へも叶
はぬと義理をせめたる隔^{へだて}の障子ひつしやり立切^同、是からお客様、其魂

を此方へ預ますればやつぱり薦僧、太夫様より尺八の稽古計りに苦しう
有まい、ほ苦勞ながらと否應を云さぬ廓の制札より面を立て預る及預る
中居の名作者客より仕立て中座敷次からぬつと瓦石大臣コリヤおさま頼ん
だ事れ空吹風、何して居るぞい、またいな、そふ氣短ふは行ぬはいな
おりや了簡かへて、われよちつと無心が有、有様ありやうハ司ヒトシもふいやじや、眞
實惚うはれたれおさまわれじや叶ハタチへてくれと手を取べ、おかし媒アカシよ氣を持
そふと、又きつい門違ハナシひ、當世門違がはやるげなかわつた事の、お
さま、ア床の間よかけて有、繪姿エイジハありや何じや、サレ何でござんせう、お前
の何と思召モロコシ、わりやしらぬか、シラぬ所が女じやわいな、モロコシ想うし
女じやな、アおれが目利は、戎島の神体シンナイと見た、あの戎といふやつが、武士
道を離ハサハセた馬鹿者、夫で町人の守神、腰拔ハサハセの根本、武士でいわば小田信永家
來の武智タチ、欺ハサハセられ一戰ハサハセも及ハサハセず詰腹ハサハセ切た大腰拔ハサハセ、そりやそふじやが

おさま返事もどきへとふじや、アリ返事もどきへおまへから聞きふ、最前の色のみ爰いはへ出だして見せさんせイヤおれが事よりわりや外ほかよ色が有あそふな懷いはの其起き請うけ拜見まひと指込腕突さきあてつき放し、切先きりさきひらりと身を、かわし、一度いちどよ引ひ出す卷物まきものと紅染くわんせん込卷絹まきぬき、小田の家いえよ傳つたひる赤旗はた是これを持た其方そのがたへ、アリ存知ぞんぢなき筈はず部屋住すみの前髪上かみり森蘭丸、女義めぎながら千本姫の血わけを分わけられし、小野のお通とおのアリ方様ほうよう、武智むちを亡なきす連判狀れんばんじょう、アリ心底こころ顯あらわしれしと額ひたいを付つる眞實しんじつ、姫ひめも初はじて安堵あん堵せり、異儀いぎを正ただし、お通とおのかた、男女めんじょへかわれ共、君きみを思おもふ心こころの誠まこと是程これほども合物あわらぶつか、自じの信永公しんのうこうへお傍奉公おほりとうこう勸すすし身みのアリお情じょうを蒙かぶり身みよ懷いはたる千本の姫ひめ、貞女ていじょを守まもる北きたの方ほう惜氣きげ妬ねねも遊ゆばず姫ひめを子ことなし給たまひふ通とお直すよお乳ちちと呼よれ寵わらわます有あがたさ、此こは恩おんいつか報ほうせんと、思おもふよ任せぬまかせぬ自じ害松永まつながが計略けりやくみては勘當かんとう受け姫夫ひめめを此こ地ちへ來きりしよ情じょうなや我君わたくしのアリ洛陽らくよう本能寺もののきよて、武智むちが爲ためのアリ生害じやうがい、アリ嫡子ちやくし信忠公しんちゅうこうさへあへ

なきはさいぞ、三法師丸様へお行衛知ず、一旦捨られ参らせても、君のほ
亂紛ひなき此姫母が腹へ賤しくも責てい守立、諸士をかたらひ一度れ
敵を討んと思へ共はかられぬが人の心、武智又隨ふ其中よも、故殿様の
事を心よ忘ぬ人あらば、味方よ頼ん其試廓こうろみくらの女の城の中、信永公の繪
像をかけ、玄らぬ人の其通、あれひど答る人有べ心底を探る爲、一つより
又第一の忠臣、眞柴大領久吉殿、播磨へ討手よ立越られ誰を力とせん人
なし、此堺の津久吉の凱陣がいじんを待心よて拟こそ爰よ此有様うやうざれ天晴のふ
志こころざし、さこうと存ながら、我君のほ存生よ勘氣を蒙る此蘭丸、ほ赦免の時
を待暮す、日月空しく都の騒動さうどう聞と等しくほ所の中かけ付見れば、口惜
や、信忠公よ早生害、小田相傳の赤旗を、敵よ渡さじと漸守護し立
歸り、是を功よ勘氣の願ひも、ナ上べきほ主人あし、ほ籠かたの千本姫せんぽんひめに繪
像のほ主人へ、お詫の取あしと頼よさん爲ため御心底ごこころをも探り見んど態敵

の匱状こしらへ、無禮の過言、真平に赦免下さるべし。あふそもじおひ我
我が假かうよも君の妻めいと、呼れし此身を色里の花車はわしゃよ中居なかゐとさげすまれ、將
軍さんのお姫様ひめさまよ傾城けいせいの道中どうちゆうを、稽古けいこさせます言譯いわわけ、お墓はかよ向むかてどふいは
ふぞ、日の本もとよ二人共ふたりともない果報かほな中なかよ生まれた甲斐かいも此様かような果報かほの拙つたわい
子こが有あふか、お通様蘭丸らんまる是非ぜひもなき浮世うきよやと親子主從手おもてよ手てを取揚屋とりあげや
の座敷打寄すきる涙なみだみあざる計けいなり、折から沖おきよ多勢たぜいの聲柱こゑばしらよかつきと白
矢やの矢や、いぶかしとお通おとおの方見みれば表おもてよ注進ちうしんと、記しるせし矢やみみ、揃そろこそ
そ、時こそ有あ日こそ有あ、眞柴久吉今日爰あよ凱陣がいじんとや、嬉うれしやく片時ただひととき
對面心おもてあんせき、儲まづかの用意よめいと云い捨て、天あまよも上あがる物見ものみの臺だい、見渡みわたせばまんく
たる、沖おきよ兵船旗ひょうぱんきさし物もの、武庫山むこやまふろしさつくと磯邊いそべ間近く漕寄こよせく、
眞先まことよかけ上あがる櫻井小新吾さくじんご、お通おとおの方聲おとこゑをかけかけ、待兼まつし太儀たいぎく、久吉
殿どのはいづくよおはする、いまだ舟ふね着つざるか何なんとく、さんい主人久

吉播州にて信永公はさいごの様子承り、敵毛利・和陸を乞、半時も早く人とのは安否を聞たしと我より先達て三日前より歸られたれば、最早此地よりくろ着岸と存じ、聞る主従又恸り、そんなら船より久吉のぬれせぬか、ボイはつと皆力落不審も、こもる一間の中、眞柴久吉是より騒がれそ旁ど、聲より心もひらくる障子、いつかは兜脱捨て無紋の上下喪服の姿、月代延て忽然と繪像の前より拜をなし、いと殊勝なる顔色より、得長院殿左大臣信永公の、は座の間より相説れば久吉とな思ひれど、我詞は則、信永公の、は錠成ぞ、謹で承知有と氣色を正し、いかよ蘭丸、汝一旦の誤みて、勘當の身を悔旗を敵の手より渡さず、小田の耻辱を雪し、勵きかんじても餘有、只今信永、堪氣を赦しわたらふる間、憚る事なく奉公せよ、去りてもお通の方、此程の心遣ひ姫の養育、其中よりかよはき女の力より、怨を伏せん謀る、かく迄心を盡されし貞女の操冥途の忘執晴たるぞと、まづ此

ごとくのは上意へ、信永公の腹中より久吉分入て見るがごとし。若黨中間
を召上られ、大國の主と成、是皆君の大恩なれば、我爲より君共親共わけ
がたき信永公、其は最期と聞たる時の脇は、づだく、又切碎かるし其悲
しみ繪像の前より喪を勤め給仕仕る忌服の長髪万分の一の宮仕へ
此かけ地をかけ置ば、仮にも此家は信永公の座所、小田居と書いて此所
を小田居茶屋と名付、又お通の方産の子の千本の姫、表向の乳母と成
守育られし堺の津乳守と名付て後より迄傾城町の古跡を残すも貞女の
譽を顯す爲、我よりは早軍の出立、暫くが間の親子の、傍使へ兼てより久吉
が付人、そろり参れど仰の下、座頭と見へしはまん丸目玉、大領様のお旁
さらすかる口屑み法師の役目彈ならひの三味線で爰みそろりと盲の
横目彌お頼りますと殘る方あき久吉の忠義と智謀をかんするばかり、
時日を移さず敵の首、墓と備ふる是第一喪の三年とやせ共事急なれ

べ、月を以て日よかゆる三日よ脱で武智が討人、先夫迄は此密事、若やれ
人よ森蘭丸、此儘爰よ傾城の司廊通ひの瓦石大臣、やつぱり元の中居の
おさま、何よも見へぬ座頭の城すめ、座敷は揃ふた廊の連判、其ほ人數の
ほ中へ拙者もお供と彌十郎願へど叶わず障子びつしやり、突出す外よ
出合頭、父の如清と見合す顔隠るゝ天蓋薦僧姿修行者に無用

○第七

兼平がさいごの志き目をあざろかす有様かなく、世の有様や弓取の、
弓の質屋の藏み入鎧羽織よ脱かへて、され共捨ぬ打物の昔の遊藝世渡
之の、徳右衛門迫鼓の指南裏表なき士も、今ハ裏屋み表ぶせ、所は九重の
都離れて花咲ぬ浪人住居物わびし、折市松殿中ゝ器用あ、東北の打なら
ひからめきくと上達、好み上ると喜之助殿の大鼓が大分上りました、
けふ山姥をさらへさつ志やれ、なんば番數が上つても忘が有ば場所

で打れぬ精出さつ玄やれ段々傳授物教るぞと不器用者を譽そやすひ當世師匠の傳授也。女共、捨松や舅殿へどこも居らるゝ、ア最前裏も居やしやんしたが、聲がせぬゝ又どこぞへゾレゝ、其様な大よそな事が有物か、迷子みなつても日の内だんないが、夜みな入たら怪我があぶない、ちやつといて見てお玄やどいふも押やる針爲業、商賣玄らす義理しらず、肝きもで世渡る相借屋の五太九郎ごく、お内儀爰の親仁殿が、あちら村の野はづれですでよ迷子みなられる所、おれがいたので漸やうやくとこちの村へ連て戻つた、氣遣ひさんすなもふ爰へ戻られる、是へゝお前方よお世話をかける笑止など、様いつ頃からやら書きとやらいふ物で、孫と一所も着物迄仕て着せど、何もかも子供の行作、わたしひ親の事玄やが、徳右衛門様の手前が、ヲ初女房、舅の親の彌助殿、殊も老病老人を大事みせよとい聖の教、お隣のお方迄いかるお世話よ、何のいの世話の互々隣同士とな

様さまへ鼓打がみ我等は博奕打ひひや同商賣どうしょうばい念比ねんぴよせよやらぬ、一昨日のく
さりを返返した夕べの祝いわひ、おれが肩かたよあやかる様さま、小遣こづけひよ取とて置おき
んせと、財布さいふから出す費かか八百、押戴いだいて涕なみぐみ、浪人ろうにんの世渡より、貧苦ひんくよせまる
を思ひやる、先日さきのひとテ此鳥目しおのめ、すべない寶たからをう受うける、近比冥ちかみやう加恐かがろしけ
れど、ほ辭退じたいも得えゆざぬ、お耻はずしらうござりますハテ、何なんの耻はずしい事ことが有あ、乙
な様さま其氣きじやひらしい子こにならぬわいの、おりやもふ獨ひとりで盆はん有あても明
家同前、火のけのけなし、爰あその内うち火がふるよつて火ひを貰うけくるお禮ごれい、喧ごん
物ものにてんやで仕廻つかまわふ、是から隙あまあ晩ばんみま喧ごん衆しゆの傍そばよ寐ねさせて貰うけふ、木賃もくしん
じやと思ふて取とて置おき玄あわやれよ親仁しんじん麿まろが戻もどられたと、夕暮ゆふぐれ近ちかき老おの暮ぐれ、八
十の三さんつ子こと守まもする祖父ちじゆは孫まごとも愚おろかよ歸もどる我門口がくもんこうさへ、白髮しらが笑顔わらわざよで
んくお太鼓おといやらくお先へわらんお共おな薩さつの舟引網ふなひきあみ手繩あわいのひもも浮うき世
也お、おば様おばさま送お見つて來きましたと、口くちよいへはお、子供こども衆しゆよふとよつ様さまをもりし

て来て下んした。貢よりヨリかちん一つ宛、あの子より是やろと、子供たら
しの赤紙人形、祖父チイシがおさへてならぬく、ほんが大事の此人形、やる事
ならぬと引たくるモ おば様モウコウ 貢ふたのじや、いやちややらぬとせり合
笑止セキシさ、五太九郎中モウ 入アリ、こりや親仁殿シンニン が尤カナじや、うぬらが慰モモクみ網引モモクて
うせおつて、貢貢ふとのふといやつら、きりくいなぬとがきめら、鍋カネへ
ぶちこんで煎レバフがきよしてこますと、かまれてせうこと泣顔クモクながら、け
たいな、氣違ひ親仁の志シテよくくと、わめいて皆ミツバチを逃歸モモクる、シテ女房、鳳殿ヒタチ、
夕ハシ膳ハシニ 夫ハシよ、ちつとの間目放ハサムしもならぬ、どこよ遊んでござんした、
あれか、おりや最前から孫モロコシを守モモクして舟ボウよ乗モモクてお伊勢様イセへ參モモクつた、何モをい
い志シテやんすやら、けつく此子モロコシがお前の守モモクする、おとましい老病、人モロコシよ連れ
ぬ所モロコシ、孫モロコシの可愛カワウばつかり、サモく安モモクへと夕ハシまモモク、又祖父様チイシまモとといいたいけな、
聲モロコシよほやく、餘念なく嬉しいく、ほんと一所モモクよまし事せふと膳モロコシ一

對なり形わらべよおどる、翁草葉のきへ落ながら浪人質氣、今日の廿八日、め
でたふほ膳はんふ上りなされ親仁様と威儀ゐぎを作れべ、かい作り志くく泣
聲打守りアレ見や志やんせ、ぐりんせないとし様でも、如在さまでないお前の孝かう
行い身みこたへて嬉し泣かへザイ聾者カツジヤ人が膳の前まへ、手をつかへて居め
さるを見りや、おれが死だら墓はかの前まへで、丁ヂどあの様よう焼香セイカウするであろ、石
塔はくみ成たら、捨松スルモミと遊ぶ事が成まいと思へば、ありや悲しいと、ないじや
くりもふよい祖父様チホジヤ涕ノラハルかんで機嫌直キゲンシキさ志やれ、京の町の燒饅頭やきまんぢゅう買カフてや
るぞと相がしや、すかすも氣の毒德右衛門、暫くほ免ハメと稽古シガコの間、こちら
はちよんの間女房ひめの膝ひざみすり寄シテ、うまい腰付ヒダリ、あの辻能ツヅキ又賞斷シヤウタクさすり
勿体ハナフない、何なさんすぞいあ、何すると、難面づれあん、壁隣かべどりで毎晩の樂しみを
聞いておりやたまらぬ、又惡口ウタクばかり、ある夜のむつごとよ、ほ身シムいかな
る故ハラより、晝ひるをば何とうべ玉の夜ならで通ひ給ハサハシぬといと不審多き

事也、コレ不審と思やらふが、先度から爰の身上持てやるゝ貴様故、養ふて置からぬ。徳右が聞ても大事ないもふ三百目いやつて有夫がいやなら錢返せ、只願いくことしなへよ、契つてほしと抱付べ、亭主が恂りヤアまた青柳のいとながく、コレ氣をながふく、隨分當を和らかよ、志んぼうが大事、稽古が大事と紛らせバ、げふも姿は耻かしの、もつてよそみや亥られなん、何の耻しい事が有契りも今宵計りいやじや、其代よ今度は、小判といふ仲人、いやかくと差付て、見せてもいかないかなボソんあらこつちヘタ、どふじやくと又抱付を祖父が引退むしやぶり付、こりや、耄め何ひろぐといわせも立す、嘘つきめ、さつきの饅頭おれよ隠して、嫁よやろとはそりやならぬ、きかぬくとたわるなきやんちや親仁も懲の邪魔、海士の諂ひ、逆立煩惱一つの利剣を拔持て彼海庭を念がける玉の汗かく弟子よりも師匠の空なる太鼓、ダラツク付まとふ、コレ又やまめが山廻

り、うろく廻つて町のあるき、五太九武智様からお觸があつて獨住の者共残らず吟味、庄屋殿迄^アちやつとも引ばられ、べしてもない事よあつたら所を撥^ハが折たけたいの悪いお觸じやと頬ふくらして山姥^{ミタマ}の行衛も「玄^アらす出て行、奥^アひ稽古打終り、又明日参じま玄^アよ。お師匠様は隠居様と辭儀する子供も手そしぶり、挨拶内儀も腹立顔工合^ア、お^アね^アと教^アの通り、庭もすり足立歸る、積押^{シヤクヤシ}さげて女房、^ア徳右衛門様貧^アい世渡りする故^ア、あの様も惡者め^ア、あなたどられるが口惜い^ア、拟^アむ三輪、何の夫を氣^アみかける事^ア、あの様な外なやつ^ア、病犬じやと思ふて除て通したがよいわいの、何よりかより親仁様、^ア機嫌^アよふお遊びなされて重疊^ア親仁様^ア、^アお眠^アふ成たそふな、爰^アでふ風召^アたら悪い、ちどあちらで^ア寝なりませ^ア、睡^アい^アく、娘添乳^アして睡^アさせてくればんと一所^ア抱れて寝よと手を引合て、行跡^ア只默然と身を悔み^ア、成果たる時世かな、現在主人

を弑したる、武智が下知の觸渡し其下より安閑と、敵も得討す生延れるふ
がいなさ、主人の最期より兼平が、大刀をくわへ逆様より貫れ死たるに、自害
の手本と謠ながら、我の最後の供はづれ、何面目の此世淺り、弓矢取身
よ取てり、羨しきの兼平と思はず知らず聲を上拳を貫く無念泣、聲聞と
がめ女房、其兼平と、お前より近付かへ。やくたいもない、五百年もの
人よ、近付が有てたまる物か、夫よ又きつい悲しがりやう、わたしや、又一
家衆かと思ふたまへこりや尤も、最前稽古の謠の中、木曾殿討れ給ひぬと
呼へる聲を聞しき、今い何をか期すべきと、思ひ定た兼平、忠臣の鑑
と思へば、ふつと涙がこぼれた、ヨシヤ徳右工門様、ふとした縁でわたしが
様な、ふつゝかな者よ入聟、もふ一月の上よも成、女夫の中よなせ打解て
寐さしやんせぬ、是れ又何いやるぞいの、あれ程打とけてねるじやない
か、ソタべも、もふ忘りやつたかいの、サア其寝間の睦言よも、お前のふ名や。

お主のお名が何といふやらつゝも、一度も咄のあいひ、心の底を打とけて寝さえやんせぬといふが無理かへ、ごりや誤り奉る何しよ北の方より毛頭隠す所存へないぢやといふて思ふても見や、大切なお主のお名が隠所でいわれる物かいの、イエー敵も得討す生ながらへると身を悔むお前のふ詞、望有は浪人との初から立つて居る便あいわたしを女房も持て下さんして、腹も痛ず捨松といふよい子を持たもお前のかけ年寄ておろかしいとし様を大切よほんの親より孝行よして下さんすお前じや物、お身の難義よ成事を、そもそも云そな女房と思ふてかいのとかきくどく、涙のしんみの誠なり、女房過分な夫故よ火よ入共厭（よんどん）心底見届た、我主君（わたくし）の武智が爲よ討れ給ひ、最期の場所よ有合さぬ身の越度追腹切て相果ても、是ぞといふ功なくて、冥途の主人よお詫すさん便もなく、所詮敵の得討す、鼓打て暮すれ、武士をやめた徳右衛門、夫が心も解て

聞そふ、そちが心も解て聞えや、元から知た百姓の娘、其心を解と有り成程へ、わたしが胸もおれが名も、いき一所みどすり寄て心を配る門の口、庄屋組中榜はかまもざへく、そり立の茶びん汗あせかく高調子、徳右内だいみか、ふ上から云渡しが有ちやつとおぼやく、アふ上とソリヤとのお上へ、ハテこなたにまだ去らぬかいの、京より今、武智十兵衛様といふ聖人せいじんが出や玄やつて、主を殺して國家をふ取なされ、政道せいどう初はじより京中の、地子錢ぢしぜんを收ゆるされた、お慈悲ひじ深い殿様、こちらの在所も京近く、土地繁昌ばんじょうとしてやらふと、お代官様だいかんさまが會所迄たるさお出故かう着持かわもつてお禮あやふ上つた、徳右衛門といふ者よお尋なさるゝ事が有、連てこいとの仰渡され、スリヤ武智殿から私わたくし尋の筋すじどり、何事かと思案しわんの脉てのひ、妻めも傍そばから氣遣きづなな事で、ないかと案わんじ顔おほ、よく徳右衛門何の悪い事わるいせまいし、さしてもない事わるいであろ、成程身府さじゅへもて只今夫めへ、いやこれく、身持みもちへ所ところやないわいなふ、今急きみ

まだおつしやつたまでも早ふと引立られ、そんなら女房いてくる程よ、何事が有ふ共、舅殿や捨松も必怪我をさせぬ様よソ大事よ、アリ、そんなりや早ふ言譯を、イヤコレお内儀案おさしやんな、何とも氣遣ひな事じやない、高では褒美でも下されるのか、但ハ繩でもかけるのか、二つの内玄やと思ふて居やしやれ、ア、ちやつと打、連て役所をさして急行、三輪がほどけぬ緒環の糸、くり返し案じ詫、お主の名ハ聞ね共、武智も討れ給ひしと、小田信永様の事、其浪人といふ事が忘れて、若歎からの吟味でりないか、功を立ねば、主人へ立ぬと有、其望の叶わぬ中、身も過へ有まいかと、何よ付ても、女氣ハ苦の置所捨松が嘆様、ねんねと抱付、祖父様と寝やつても肌が寒ふて悪からん嘆、とねやしと肘枕、たゞき付れば氣さん玄な、宵寝まだひの宵の闇歩が走てお内儀様、氣の毒な事が出来た、徳右工門様をけふのお召り、小田信忠殿の胤よ、ア、三法師とやら、梅干とやらとふ

でも種の詮議、爰の宿亭主に疑かしり、お役人が取まいて、モウ恐しい詮議
見た故、内證ちよつとえらしますと、云捨歸れば氣も狂亂、拵こそ夫の食
の大事死ば一所を帶引しめ一世のせど口向ふる同じくせきくる女同
士互ははたとつまづきながらかけ行帶を志つかと取卒示ながら跡あ
追人のかしる者かくまふて貰ひたい、そつちをこつちよ急な難義が
有、そこ放さんせやくくどく有ても頼みやならぬ、ニ邪魔らしいとふり
放せば刀ひらりと目先み指付、承引なければ通さぬく、武智が追人よ
捕へられ、わらへが死る命、厭ぬ、負奉る此君、日本又一人の宿胤、おか
くまひすれ、聞すべ切捨、何と、何うすりや、其お子の小田の公達
三法師丸様か、お前様、此若殿を産だ松浦、扱い城之助信忠公の北
の宿方、恐れ多やな氣遣ひ遊ばず、私が夫のあなたのお家來、おか
くまひゆ上させふ、過分なぞや其若さへ預たれば敵よあふても心安

し自あつが命みやうの不定一生の別れもふさらばと夕闇ゆゆ、目の星月夜はと出たる隣となりの五太九郎ごたくろう、信忠の伴三法師母の松浦引ひつくもつて武智殿のほ褒美めいよ預よだると、いへせもあへず真額まかく、肩先かたさきかけて手利てきの切先きりさき、さすが武將ぶじょうの北きたの方、若わらわを頼たのむと云い捨すえすがたたくも霧きり重かさる當感とうかく、夫めの命みやうも氣遣きやりひ也ゆ、此公達きんだちの隠かざし所ところとやらん、難義なんぎを押入おしりよほ運うんを守まもの神様かみさまよ、わたしがくる迄までかんならず聲こゑばしむ立たつなされなど、外ほかから乞こつかとつま、引上ひのつまの行衛ぎやうを乞こたひ行跡ぎやうせきよ不便ふべんや捨松すてまつ、一人此家このいえ、捨小舟すてこふね便びんなざさの、ひすれ草ひぐら種時殘ときののこすみどり子こを、ぼんよ暁あけのわれを捨てすていんだか可愛かわいくもふ泣なきな、祖父ちいがぼつぼとすかかしても、いたひしや稚子わらわ、西にしも東ひがしも、走はしら浪なみの引ひみほ、かれよ泣迷なきまよふふ、としや嘆かめの胴欲どうよくなやつぢやねあいつららの居ゐいでもだんないぞよ、祖父ちいとぼんと人形廻まわし玄くつて遊あそぼと、取出ひだつす持もち遊び人形箱ひとがたばこ、祖父ちいの辨慶べんけい、ぼんの牛若うわが、五條ごじょうの橋はしのたべこぼん、ないやつと

とうく友呼わらべ押入の内うち出る三法師、おれも遊ばと立交る姿まねけ
だかき公達きんだちの有家を尋る武智ぶぢが郎らう等山熊太郎さんゆうたろう、德右衛門とくざゑもんが宅いぢに是ぜよ至
物ものぐさい此家の内亭うちてい主めをおびき出し、庄屋方しょうやかたも留置りゅうぢし跡あとへ廻まわつて
すり合點すりあひかど家來けらえ唄うた覗きうかふ共、白髮しらはの彌助公達みすけの、顔打おもてうちながめ、ありや誰だじ
やどこの子こじや、ほんが大事の牛若うわかをなせ此様これようも首落くびおちした、寄よる事ことあら
ぬぬく、サアいねいねくと呵げられて、稚心わらこも涙なみだぐみ、かゞ様かづさまの見みへる迄まで、祖父おじいよ
傍そばより置おいたてくれと、立兼給たまわらへばば、いまいまくしげ、きりきりく出てでうせおらぬ
かと、手てを引立ひきだて情じょうなく、表おもてへがひと突出しゆしゆす、太郎たろうすかさず、鷲撲わしづかみて、挑燈差上てうぢん
とつくと改あらため頬付ほほつけのうづ高たかさ、綾あやの下着さげよろ、武運ぶうん長久ちうくの祖園守さぶらん、小田おだの嫡孫ちやくそん、
三法師丸まるも相違さうりなし、根ねを斷きて葉はを枯かす敵たちの種たね、武智殿ぶぢだんのふ心こころやすめと
薔ばらの細首ほそさげ切きりよ、志したり顔おもてよて立歸たちかへる、運うんの極ごくめぞ是非ぜひなけれ、やも時
うら、四よつの告つげ忍しのびの乗物のりもの立たさせて、千人せんじんも勝まされし大名風だいめいふう、骨柄くねがらゆくしく

門の口、眞柴大領久吉、參上と音なへ共、答へも葉屋の呼子鳥、志づく通
り兩手をつき、親人様は堅体のほ顔を拜乞、大悅至極と相述れば、ハ殿様
がござつたわい、此人形廻すのへほんとおれとばつかり玄やぞ、ア親人、
我子の顔は見忘れいか、久ぐ遠ざかり罷有、不孝の段を赦免下され、
屋敷へ供仕度身の願ひ、イヤくおりや殿様嫌ひ玄や、もふいねくとあち
らむく、取てつきはも難題の詮議を漸徳右衛門、内の氣づかひ足も空、
息つぎあへず表の方、行當つたる稚子の死骸をすかし見、アすりや、たつ
た今聞たゞ違はず、三法師丸のは死骸と憚り一度よ顔見合せ、柴田權六
勝成、さいふい眞柴久吉よな、ハ心得ぬ、三法師殿打れ給ふ時も時、主人
の最期を見ながら落付顔の久吉、扱は武智又降参したよな、ヨリ人非人め
遁さじと、嗜切先切付る柄よて丁ど門口へ戻るお三輪が氣は、アリヤ手向
ひせぬ先待たど、大小ぐらりと久吉の優美又猶も付入刀、乞つかと押

へ、柴田權六、邊の子息捨松と名を付て、かくまひ置れし小田の嫡孫、誠
の三法師君、久吉に迎え参りたり聊示、有あと平伏有、彌助へぢろく打
守り、ア殿様は大小入ぬかず、そんならおれが貰ふたど、一腰亥やんと刀
を杖、サ侍の魂が入たれば、耄はモウ是切、恃堅固で有たな、尾州中村郷の片
隅、とかゞまり住たる彌助が恃、大名も立身忘て是迄再三迎ひの使者お
越たれ共、不義の出世の却て耻辱氣も合ぬ呼使も相手も成も面倒さ
も耄と云立、其方が成行を窺ひ、誠の武士と呼るも時を日をかぞへて待て
居る此親が謎解て來たか解すも來たか綾錦のまども共魂の出世が
見たい何とくと有ければ、ア御掟の趣委細承知仕る、其謎の解人、女
房、くれは早く參れの聲侍兼まろび出たる其姿、アそんなら最前、松浦様
と名乗たる前、久吉殿の内證か、スリヤ此死骸の稚子、ア二人の中の
子でござんすと、かつばと、ふして泣居たる、ヤイ、女房、不調法、千万な、見苦し

い泣顔をふ目又かけい迎呼出をふかのふ親人信忠公の胤と草を分て詮議最中三法師殿又伴を仕立敵の手又かけさせし、小田の従類を絶せしと武智又油斷さする計畧君の爲み一人の子を殺し子孫の榮花よ目をかけぬ久吉が魂に心又叶ひしか今日迄お逢なされぬ孫の秀若死骸又成て汝目見へ肌又かけたる守み、伴が戒名珠數一れん壽命長久息災延命との祈すして我子の命を取給へど佛神又祈る此守りハ未來の血脉經^{アラシ}唯子孫かと一言汝詞かけて給られかし^{アラシ}女房そちも久吉が妻でないか涙拂ふて親人又汝對面やせ、エ未練至極と白眼付られなぐく^{アラシ}耻かしや氏素性此下兵吉迎足輕の渡り奉公の其時から夫婦よ成た賤のふ瀧今大名の奥方と姿成ても心の未練子を殺しても泣きやんせぬお前の眞柴久吉といふ誠の弓取わ志や弓取の女房は是べつかり得ならぬ堪忍玄て下さんせ昨日迄も此子より何よりもいふて

聞すあとの口留なれど、若も未來で迷ひふかと、夕べの添寐より秀若、そ
なたの父様の云付で、先殿様信永公の座なさるし、冥途と云所へ、使
よ行ねばあらぬぞやと云聞せば得心して、使ふ行ならむ父様の様よ馬
よ乗て行たい。うばも行かべいもくるかと、氏神參か何ぞの様、よなんぼ
大勢誘ても、冥途の道でいたつをなた一人玄やわいの、諸議中の奥様
の立身出世も何よせう、元の垣生の其中で、そなたを抱て寐程の樂が
あろかいのと、心の限り、かきくどく、夫婦の義心肝よこたへて、祖父彌助
孫よ出かしたくよふ死だ、閻魔の廳で將軍の公達と名乗べ、草履取
から大名よ成親よりも勝た出世玄や、入智の權六が連子と隠せど隠れ
ぬ、天晴備る人相よ當時に行衛知ざる若君と知たるゝ、猶もお傍を離ぬ
筆けふしも來たる此秀若、公達よ仕立有り、小田の忠臣の計ひよなど、感
ずる折から門口よ武智が侍、折幸と突出して見殺しよした時、欲さ五

ましらねど血筋の縁、最前祖父よと一言いふたり、天然を虫が志らした
物、むごつけなふたしき出しが、逢初めの逢納おうのうめ首くびへあけれど初孫を
我わよも少し抱してくれば、花の様な子この死で、益ますもなき長生やよ枯木の様
成祖父の顔、わから涙なみだと取ませてわたしが爲ためり甥おい子共いふいなか
き玉よべひ、初はじて兄嫁いとこめしん小姑こきよ眞まことに泣なき寄よりさけび泣なき百萬の矢先やさきよも、びつつつく共
せぬ久吉公子故の涙はらく、とどりめ兼てぞ見へけるが、威儀ゐぎを改かめ
のふ權六ごんろく所存ところざんを明あし迎むかひ參さんりし、親人よりも三法師殿、武智追ぶぢ討うちの
惣大將そうだいしょう供そなへ立歸たちかへらん。ヤソふれ成なまい、騒動さうどうの時とき所ところへかけ付つけおき、奪だつひ取とは此權六、誠公達じゆうこうだつを太切おほきく存のる久吉ならば、とくよも參さんつてなせに守まつ
護まつはゆされぬ、實尤じつゆ其爲そのよ先達せんたつて、付置つけおきたる、守護の侍、加藤虎之助清正、是
人來れと詞ことえ從つひのたれ伏ふたる五太九郎ごたくじゅうろうむつくと起立おきだて倍臣ばいしんながら主
八やの名代めいだい播州ばんしゅう發向はつきむかうの供そなへ參さんりしと僞いつわてけふ迄隣ごくりんよ付添そづたれ、公達きよだつ

の守護一つよは親殿への奉公、其かい有て今日只今は親子の對面相濟たる拙者が大慶、主人の爲よは唐高麗へも飛あるく千里一翻虎之助、腕よ覺の大膽不敵、くれば様と云合せまつから切れた向ふ疵の武智を亡す高名始々いざに立といさみ立たる眞柴の忠臣、鬼よも加藤清正が手柄の末世よ隠れなしでかいたく去ながら憐久吉よは其貴、松下といふ古主有、親よも子よも目をかけてり、二人の主よは仕へ難し、今
の主君よ我子を捨、昔の主よは親を捨よ、たゞへ此後いか程の出世へする共、米一粒施請てい古主へ立す、此儘爰よ引籠り、白髪を切て捨坊主、真柴筑前の大領を、子よ持たる手柄者筑阿彌と名を改め、孫が菩提を弔計、親子の對面是限り、此切髪を今よりは親の筐と持給へさらばく、公達よは餓別の末廣がり、祖父が寸志と差出せばハッア有がたしく、是門出の陣扇身體髪膚を譲られし父の髪筋親子は一軀、扇の骨よ碎る共四十四本

の竹のこぎり主人の敵を退詰く、城の地紙を押破りみあ紅の赤旗を
燐かしては目みかけん、夫をこそ松の落葉のながらへて浮世を離何
事も聞ず白髪の耄親仁、七つ又成子がいたいけな事いふた、祖父を懸し
と、時雨ふる、孫よ我子よ、わと甥子、志たへど今いかいぞなき、めいぞの闇
の獨旅、可愛や不便と泣涙父の忍びて小鼓の音を鳴千鳥老の浪と、主
る妹歸る嫁、妻子を忘れ身を忘れ君を守護して立出る勇士の門出ぞ。

○第八

上り下りみ見渡せば淀の繼橋、時鳥泣つる方の鬨の聲、八幡山崎寶寺、よ
い風景も忽々修羅の巷と引かひり物すざまじき景色あり、どこの在所
も乱世よハ農作止て庄屋年寄百姓引連もいやもや、調子供を堤へ遣ま
いぞや、若し流矢鉄砲の玉が反て當ろも知ぬぞや、シテ何と皆の衆きつい
騒動で、あいか、真柴様と武智様、ア山崎でけさから軍何方へ團扇が

上らふぞいのいやもふ庄屋殿のおつしやる事じやが、お主を悪ふした人なれべ、武智様より最負がない。そふもいられぬ、京の地子が赦してから、都の衆が武智様を、ほ開山の様と云ふまするわいの、ナ九助、いやもふ京の衆のよいかしらぬが、彼岸よ成ても、麥はよふ時す、大根蕪もよふふろさす、百姓の上つたりや、そふじや共、マイ兎角肩のよい人の真柴様、松下といふ浪人よ草履取して居たわろが、今でハ大名、ヨ源六人の事計いひ、共口よ喰えがくを仕やいのふさればのふ、握飯でも軍場へ賣て見よかいの。夫はいらぬ物、雜兵などよくはしたら慥よ喰遁、夫々の先番を一荷かたげていて、拾ひ首かひよつと又、兜首拾ふたら、夫こそほ褒美若又大將の首ならべ、大名よ成ぞや、ハめつそふな子供や、嘷が甘四文で養れるかと眞顔みて、うどんと思ふぐどんさが、やつぱり在所の堅氣なり、中よも庄屋が分別顔、コレく皆の衆わるい分別、ア其軍場へ行のが命がけ、

おれが又思案ひ、在所中が云合せ、燒尖の竹鎗を捨てて、あしこかちぬ
よつと出し、爰からぬつと出し、出す程よく、こりやたまらぬと落
武者が、逃る所を突殺し、鎧甲太刀刀奪取て賣たらば、好金設よからがや、
氣疎に分別へいやもふ平治様の一生の分別、コヤ當りました、そんな
らば在所中で究竟な者撰出して勧かそ、マイ是の夫でよいが氣の毒な
事が有わいの、コレ皆見て玄や有ふが此川上より先度から、年比ハ三十餘
りの女、よされたれどよい着物着て、川端よりそとバを立、回向玄て居る故、
合點がいかぬと思ふて毎日庄屋の役目でいて見るよ、物くふ体も見へ
ず、どふやら在所の難義^{なんぎ}、成そふと思ひるし、さればの庄屋殿のいは玄
やる通よ、いか様あれひふしきな女子、歌やら何やら書いて有ど一つも讀
ぬ、此比も聞べ大坂の道頓堀で京の客が幽靈^{ゆうれい}よ成て來て、お山よ逢たと
の噂、若其幽靈の類でい有まいかと、例の在所の、これ高咄あれく向ふ

の堤のづみをば雑兵まざうひや共ともが走はるのは、軍の勝負じふが有あたと見みへる夫おらば此道このみちへ落おちてくるハ定じやうの物もの、さうく急きゅうよ竹館たけやかたを掠こしらへて鎧甲よろいこうを剥むしで取と。勢そろへ揃そろは在所なほの道場だぢじやう庄屋しょうやの平治様ひやうじやうよ埃向ほこりむきを持もせて、大將だいじょう、まつと大きな聲こゑでかけ引ひきとなされすば、下百姓しもひやが廻まわるまい。扱あ一番鎧ゆきの九助くすけがよからう、小がらなれども膽はらがゑらふて氣きがさ者もの、二番は源六げんろく、顔おほがどうやら侍仕らしうて見みせ大根だいこんよりい恰好かうかう、又藏くらの事ことふをこると跡あと玄げんよりをしらし、よつて跡備あとびへ勘かん兵ひょう衛えは兵糧役ひょうりょうえき、隨分ついぶんと始末しめつさつしやれ着き到いたを付つるのは寺子屋てらこやの源藏げんざうがよからう、マ是まで軍の手配てびもよいが、隨分氣きを強よふせねばならぬよつて、十文づだいぶんづがの切合きわめて、目めで一つ呑のでいこ、よからく、扱あ此庄屋こちしょうやが智略ちりょく、又は向むかふあやつが強いと見みたら逃のがたがよい弱よいと見みたら剝むしだがよひ、こりや庄屋殿しょうやでんきつい軍法ぐんぽの奥義おぎと百姓ひや共ともいさみ立たぢ、強よいやつめは逃のがたがよい弱よいやつめはいだがよいわわもやそふ思おもふて居ゐわいなそ

ふだんべいく、相談極り百姓共竹館用意と大將の、庄屋殿先と押立て
打連「我家へ立歸る、物騒がしき世の中も、秋へ淋しき虫の聲、蟬の小川の
流の末非人と見へず狂氣共見へぬ女の爪はづれ、垢付たれと衣服さへ
並まならぬ世捨人、濱邊より立し、一木の印、一見卒都婆永離三惡道、五十五
年の夢覺て一元より歸す、明窓玄智禪定門出離生死頓生菩提と回向をな
し、水を手向香を炷、一枝の花より立そゆる、其有様ぞ只ならぬ、一釣竿より
一生涯を樂しむと、古人の詞より寄糸の心曲ぬ、釣ばりふろし、流より隨ひく
る人、六十餘りの老人の、腰より一腰絶ざぬれ、昔の由縁と汀の方立ども
まつて見わたせば、霧立山より家よりの旗差物、秋風よりひるがへり、八幡山嶺、
淀桂數万の軍勢みちくして、矢さけびの音、鬨の聲、真柴武智が天下わけ
めの公軍、いづれが勝共負共、主持身の氣さんじさ、なむ三餌を取れた
と、又差かゆる餌印籠、道理で漁が利ぬと思へば、爰あ女が眞言陀羅尼だ

らく遊び休もふと、きせる取出しすり火燧、明珍かちく吸付ていか
様世界の様よ、此比毎日来てみれば、そとばを立て香花の手向、誰が爲の
回向ぞやと立休らへば見向もせず、只一心よぶつゝと讀經も、口の内
悟切た女子玄やなア朝暮食事の躰も見へず、ひ玄よの覺悟か、火の物斷
か、但羽衣失ふた、天女の下界へおりたのか、夫ハ東の三保の浦爰れ所も
小栗柄の都々近き繁花の街道、どうでも一くせ有女と、よくく見られ
靈前よ書て備し發句と、詩心あらんと讀下せば、蚊をいとふ、犬よぞくれ
るからだかる、此發句は光明皇后のほ歌よ、我死ば焼な埋な野よ捨て、餓
たる犬の腹をこやさんと、詠給ひし心も同じ、賤い女よひ驚入、詩は又何
考や漸人界を去て、今正よ生天よ反ると、吟じ返しくり返し暫見とれて
不ば、身の上を咄そふよも、どふ人迹も松の風、世よ捨られし孤獨の女と、
一人言ひふ其有様、心よくしと立寄て、身の上の子細を問て、何の益あき

事ながら落命でもする人なれば、助るひ玄ひミ女中、聞て苦し^ムない事
ならば、咄しも俱よ他生の縁包す様子を語られよ。よふこそお尋添し、去
ながら身の上の咄をやさふみも、我身で我身の事を玄らず、只死^ムるよ
り外心の内よ、様子といふてさらゝなし、浮世よ飽た私が身の上、何よ
もお尋下さるなど、ちり灰付ねば釣人^{アリビト}も、鞠果たる折こそ有、向ふの堤^{ハシ}
旅人の聲^{ヨコ}、山崎の合戦^ハ、武智方^{アキカネ}が敗軍^{ハシゴン}みて、一類郎^{クラウジ}從討死^{スル}と、咄^{ハシ}すを聞
きはつと計、暫し涙よくれ居たる、扱こそ——子細あらんと思ふたよ違
へず、今合戦の様子を開て落涙^{ハラル}、由縁の人でも有ての事か、そなたの親
の名^ハ何ども、問れて女もさし真耻^{マツチ}かしや、誰有ふ^ト土岐^{トキ}の家中妻木勘解
由^ハ娘也^{ヤア}、夫ならば其方が稚名^{ハサウメ}、お捨^{ハサウメ}と云ぬか、よふに存知^{ゼンチ}、玄ら
いでならふか、そちが眞實^{シンジツ}の爺親松下嘉平次玄やわい^{ヤシ}、あつかしやく
と取手を拂ひ、なふそんあ親覺へなしと、立を引とめ^テ、疑ふり尤^モ、そあ

母が厄年^{厄年}の子、母^母もあらふかとおとが三つの年土岐の家中妻木
勘解由^{勘解由}へ養子^{養子}を遣^遣へし、我^我も夫^夫子細有て浪人^{浪人}と成武士^{武士}をやめる心故
一人の男子も町人の子^子を遣^遣へせしが、稚時^{稚時}又別れたる娘の顔^顔、^お面^面ざし
やつぱり母^母、無事^{無事}で有たか嬉^嬉しやど、いふ^{いふ}云れぬ死覺悟^{死覺悟}見る^{見る}よせま
りし親心^{親心}、何事^{何事}も爰^爰で云ぬ、我家^{我家}へ連んと引立れば^は今おつまやる事
共^共一^一覺^覺有^有けれど、親共^{親共}いれぬ私^私が心^心は推量遊^{推量遊}ばしてど、夫^夫と我子
隠^隠せ共^共一所^{一所}死^死たい念願^{念願}を、心^心で思^思へど、明^明さぬはちよ^{ちよ}碎^碎くる胸の
鬪^鬪、嘉平次^{嘉平次}も聲^聲あらうげ死^死る覺悟^{覺悟}と極^極ふ共爰^{共爰}で死ねば死れぬか幸^幸そち
が弟^弟も、武士立^立ぬ氣^氣でやつたれど、町人の爺^爺親^親も勘當^{勘當}受^受て、戻^戻りしが、親の
心^心も引^引かへて、見所^{見所}の有^有悴^悴故^故、二度^{二度}我子^{我子}となしたるぞ、そちも又其通^{其通}夫の
名^名を^を包^包む心底^{心底}道^道の武士^{武士}の娘也、一先^{一先}我家^{我家}へ立^立歸^歸れど、親のいざめよせ
五^五かたも今さら何^何と夕^夕時^時雨^雨涙^涙の雨^雨と諸^諸共^共、印^印のそと^とが^がかき抱^抱き、軍^軍

方をふり返り見て涙ないては見こぼす、涙の果なしの堤傳ひを親子連あくく歸るふぐるすの家路を、さして「行空の雲も轟く勝鬨の貝鐘太鼓乱調み野邊も山路も震動せり、武智の末子重次郎光慶、年の數さへ後の月赤糸威の兒鎧落武者と見られじとわざと甲に着ぎりけり、連錢足毛み打乗て父の行衛をふぐるす迄跡を慕ふて馳くれば、すば落武者遁すあと、真柴の軍兵追取まく、キ物よしと鞍がさみ延上り、遠き者の音よりも聞近き者に目よも見よ、武智が末子重次郎光慶、年は僅十三歳、我とおもほん輩に寄てくれと呼りし、勇氣さかんの武者ぶりげよも武智光秀が子也と見へていさぎよし、物ないにすな討取と馬の前後よひたくくと寄くるやつべら夢切の太刀ぬきかざし八方四方、あぎ立て一切廻れば軍兵共、小腕の打太刀受兼て、ちりくべつと村鳥の雲や霞と引かへす、相手なければ重次郎、馬乗としめ東西を見渡しく、父

上のふくと尋廻り呼廻れど、行方の知ざるゝ早落給ふ物ならんと。
鎧の端を踏そらし跡をしたふて尋行、山川万里も一面よ敵ならぬ所もなく天よ跼り、地よ足立る方もなき。武智十兵衛光秀は、栗毛の名馬よ打跨り、鎧よ蓑毛と矢をひながら、大わらひよ戰ひ勞れ、落人の身とならの葉の薄の穂よも心置、馬を早めて子の行衛尋くるくおぐるすの、數かげよ息休め延上りてい重次郎やいゝ、我子ひいづくと聲はり上重次郎やいゝとよべどさけべど物音は勝鬨の聲凱陣の貝鑓太鼓の音ならで答なけれど光秀は若跡を落くるかと見返る傍の藪のかげ、所の百姓聲もよし落人討とめて、太刀物の具を奪取と、藪影をわめくよぞ折節ふりくる村時雨、藪を小楯よ國次の太刀抜そべめ、寄來らば撫切と八方よ眼を配り立たる後の藪影を透間を窺ひ竹館よて、鎧の脇當やつと突心得たりと竹館をはずすつぱと切放し、竹の館先引ぬけば血

ハ瀧津瀬急所の痛手いたも亂れ、眼くらめど屈せぬ光秀、馬乘放し立たる向ふへ蓑笠着たる百姓共落人遁すな討取てんと、手手ててよ竹鎗提ひづさげよ、おめきさけんでかけ向ふむかよつとい蓑虫みのむしめらと太刀まつ真向まむかよ差かざし、追つまくつつ切廻きりまわし、欲一遍べんの百姓共こりや又つよい侍さむらい玄げんやと、我先まへよと遡退のけのきしが、又むらくと大勢が突かしるを切はらひ、名なよふ武智むぢが死物狂しものくるひ、雲霞うんかのごとくむらがる百姓八方無盡むじんよ切ちらされ、命が大事と逃のがちつたり、深疵ふかきず又弱よほれ共尋みゆる我子わがこよ心こころもそろ、西よ東ひがとかけ廻り、又も土民どみんが來らんかと、落たる蓑笠みのり鎧よろひの上うへよ引かつぎ武智むぢ沓くつといて、前なる池いけてあしそしき、草鞋くつよはきかへ土民どみんの形去あらざるよつて此池を武智十兵衛むぢじゅうびやう光秀が足洗あしあら池武智むぢが藪いにしへと今いまよ傳つたへておぐるすの星ほしよ古跡こせきと、残しける、逃のがちつたる百姓共薄すこの隈くまよ藪いにしへかげかげよばらくとかけ出だく、今の侍手しと玄げんぶいやつ、皆怪けが我わになかつたかよと、庄屋年寄しょうやねんきが人集あつめ、九助源六くすけげんろくあぶ

ない事、エ井戸ばたの小兵衛が仕やせなんだか、何と今、やつが着て居た鎧よろいへ、金銀づくめでよい衆の門徒佛檀もんとぶだんを見る様、有た、六兵衛が逃おとる、又どつぼへはまつた時とき、なむ三切れたと思ふたがよふ助かつた、其かひりよ身中みうちが小便べんくさからふ、ア在所中うちが怪家けがせいでめでたい、
サ皆並そなわば玄あられく、一人二人と讀合よみあす中なかへ武智ぶぢも打交まつせしり、いかよ玄あらても今、の落武者らくぶしゃ、玄あらめたら在所のきふひ追おひおかけ討うちとめふ玄あらて有あまい
か、よからく、皆ござれど、庄屋殿しょうおくでんを先まえ立たて、いさみみいさんで行跡ゆき、武智ぶぢの我身の隠笠かくねがさ引ひまどひく、重次郎じゆじろうやいく、と呼よでれといまりいて
ハ呼よもふ行過ゆきたかまだ跡あと、迷まよふ辻つじうらまがひ道みち、心こころそらうよ鳴鐘なるかなも
一ツ二ツ三ツ、四ツと晝ひ我子の年、重次郎じゆじろうやい、涙なみだよ道みちも見みへわかず
尋行たずねゆくこそ、「びんなけれ」

○第九

爰よ松下嘉平次といふ者有元遠江の産なりしが故有て浪人し浮世を
夢と伏見の里とこゝなり住バ世の中の騒しきよも屈陀せず豊よ暮す
庭木迄己が氣なりとすねくろしき松下氏と持はやす近郷の百姓共て
ん手よ竹館卷ざつば大勢打連門口から嘉平次様お宿よかちつとお目
よかしりたいとぞやく入べ近在の若い者共見りや竹館やうの物
を持大勢連で出かけたりと聞いたこそや又落武者を見付次第武具を
剥ん爲など聞て中よも年かさな與茂作が志や志やり出成程御推量の
通きのふけふ迄天子將軍の様よ持はやした武智光秀今日山崎の合戦
よ何が久吉よ攻付られ尻よ帆かけて軍塲をかけ落若此邊よ隠れか
えで居るならバ早速注心せば大分褒美下されうと有事夫で其通觸て
廻り次手よ落武者を見付たら此竹館で泥龜突金設ふあら今此時に前
も内よぐづついて居ずと一所よ出かけてござりませこちらが傍よ付

て居れバ、鐵の楯も同前、こはい事は微塵もあいと、強い詞よ嘉平治打笑。
成程身達と伴ふたら、こはい事は有まいが、年寄て入ぬ腕立、若い者ハ
若い同士、慄一作も落武者の武具取らんと、とくろ宿を出たれば尋逢て、
楯も成と力も成と、頼んで手柄忘たがよい、すりや一作殿もふいて
か、有様にこちら計で、氣味が悪さみお前を楯とする心に子息がいて
なら夫こそ本の鐵の楯ぞや、こひい事も何にもない、強いやつも出わふ
たら、高が遡るふんの事サ皆こいゝと野武士共、打連立て出て行、嘉平
治跡を打詠め、國の諸侯、峰のごとくおこり、蟻のごとく群る乱世、只一
統も切納めし信永、信長といふ鬼の再来とおち恐れし名將なれど、家
臣武智が逆刃も命を落す、主人を殺し權威を盜む武智光秀、己れ弓矢の
棟梁と逆威を振ふも僅の間、三日天下と世の諺、今久吉も攻立られ又敗
軍の將と成事盛衰と云ふながら斯迄潤る世の中も澄れ佛の教只後

世こそハ大事ならん奥入て看經せんと、獨つぶやき立づくと、一闇
の内へ入相の鐘かうくと響ける、槿花一日の榮今ぞ我身又弓取の身
の成果ぞ哀なる、武智十兵衛光秀、今日の軍又利を失ひ數万の手勢
ちりよ其身も深手生長有、我子ハいかゝ成行しと猛き心も夜の鶴子故
ま迷ひ伏見の里とある家居又立休らひ當所不知案内の者成が急病
犯され難義又及ぶ、暫くの保養の間一宿の恩借又預りたしと、案内の渡
聞へるも二世の縁、さつきハ一間立出ですかす月かけ甲冑又出立姿
我夫、光秀様かなつかしやと、飛立心を押えづめ、見廻す床の玉椿一本
携へ戸口又出物をもいはず指出せば、こなたハ不審と手又取上、往吉太
田道觀み、山吹の花を以て實の一つだよなきといふ心を志らず、此椿も
其ごとく、一宿叶ぬとの斷成や、愚直の身又いとげやらぬ花の心、女
性いかよと夕月又見合す頃、女房と知てもわざと白玉椿たゞ打守る

計なり、さつきへ目と持涙ながら、山崎の一戦と打負し落人、我討取んと
鶴の目鷹の目、殊々此家へ松下嘉平次といふ浪人なれば、暫くも身を
留る所とあらず、いづくいか成山奥とも姿を隠し、其玉椿の八千代迄生
ながらへて下さんせ。かういふ間も氣遣ひあり、早ふといふ中も云たい
事問たい事第一我子の重次郎、いかゞ成しお氣遣ひと思へと夫と得い
れぬのけべ他人の身ぞつらき、扱ひ松下嘉平次といふれ此家とな、幸
の身の置所、見参の上相頼ん、在宿成やと打通る、袖を扣へて、待た、身
の敵久吉より内縁も有松下嘉平次、お前の名を聞たらば、お爲みならぬ
が合點か、久吉より縁有嘉平次面白し、我爲みよき城郭、夫の石を抱て
淵み入、物好も時より、ひらは此場へ落給へと、せりあふ内方主の聲、松
下嘉平次が宿所と聞、猶も一宿望まる、一曲有お客人、お宿アサふいざ
先是へと、詞よおめす脱捨る、蓑とかさなる憂事よ、さつき駒をふさへ

居る、光秀上座、とむづと座し、聞及びし高名、松下氏、とい貴殿よな、初ての
對面、と一宿の無心過分至極、と一禮も深手を懸す息づかひ、夫と悟れど
さあらぬ風情、一樹のかげ、一河の流も他生の縁といゆながら、見ました
所が甲冑のお侍、乗捨の馬もなく、續勢も見へざるに必定軍敗北の落人、
我名を聞て一宿を望まるし、貴公の御所存いぶからしと、聞て光秀威儀繕
ひ推察の通山崎の、一駆み利を失ひ、かく落人と成たる某所詮開くべき、
運よもあらねば潔く切腹との存ずれど、すてがたき恩愛の悼戰場よて
見失ひ、赤生死も知されば其安否聞迄と、耻抑拭ふて此仕合、大地廣しと
ナセ共久吉が大軍防がん者、貴殿より外覺なし、拟こそ無心、ナたりと子細
を聞いて打點き、スリヤ大領久吉よ追すくめられ敗北有し貴公のふ名ハと尋
ヌ有無の返答も、投出す竹の切先を、手よ取て打守り、と血沙亥み込竹の
切先、夫こそ則我本名々すせや此竹血と、光秀が館疵又心を付、助るま

しき必死の痛手、苦痛を厭ひぬ猛將も、遺恩愛迷ひ子の生死の行瀬知る
迄、心安く御逗留、然らばかくまひ下さるゝか垣生なれど久吉が爲
れ、石當城を堅固の城郭、ア、添し頼も玄し、と悦ぶ武智女房も、安堵より吐息
つく計、猶も嘉平次心付烈しき秋の夜嵐の、疵よ當らば悪かりなんいざ
奥の間へ御案内と、殘る方あき深切よ、辭するに却て不禮ぞと松下氏よ
誘いれ、武智い、「一間へ入よけり、跡よい心、さつき闇迷ひはぐれし我子の
噂、餘所よ聞ど兎や角くと、あんじ入たる折からよ、立歸る一作が心の
ふしも猛々敷竹館かたげふらゝと戻りかしりし我家の内、見訓ぬ女
の只一人玄かも愁よ玄づむ体、子細あらんとはいりもやらず戸口よ貌
ひ聞ぞ共、内ひ白木の卒都婆を出し、聞へぬぞや我夫忠孝の二字こそ
武士の刀脇差、必忠義忘るなど、我子へ常よ教訓の、其詞よ引かへて主
を討たる大惡不道、天罰いかで道るべき、淺ましい死を遂給へんと思へ

ハ身も世もあられぬ戀しさ所證淵川へも身を沈め、其憂目を見まい物
と我身の覺悟の極めても情なきいお身の上、主殺しの大罪人とならん
あとよ誰有て、とひ吊りん人連も名のみをせて石碑も残し、無縁の人
の回向でも受なば露も後世の爲と惜からぬ身を捨てせず、石碑營む其
内よ、ふしきよも眞實のと、様よ廻り逢、此家へ來りし其日もさらすお
前よ逢ひ盡せぬ縁と、うれしさより悲しさの猶餘り有因果な此身、真
實の親よさへ、つれ添夫の武智十兵衛光秀といはれぬ様よ成果しも皆
お前の悪心故、何よも玄らぬ重次郎迄、俱よ惡名蒙るのみか、行衛なう成
たるの親の惡事をうとみ果討死でもなしつるか可愛の者やいちらし
やと、夫を恨子を玄たひ聲をも立ず伏しづむ、始終の様子内と外聞居る
一作聞居る嘉平次互よ一物隔の一間そつと立切立忍ぶ、一作は何氣な
く只今罷歸りしと、すつとはいればこなたぬ拘り、あたふた卒都婆押懸

し涙止どよめて立向へば、一作わざと不審顔ふしうおもて。こりや見馴みなまぬ女中様親仁様おひるひやうなど
こゑござると聞てさつきが傍そばよ寄よせ、親父様おとうひやうといやるから稚おさむい時ごろ
別れたる、弟の一作じやのう成程せいじゆおれい一作じやが、そふいふこあたり、
ち、合點あての行はり理ほり、けふけふしきよとく様よう廻まわり逢まつ伴ともて立歸たきりし、そ
なたの姉あねのさつきがやわいの、すりや兼て父の咄とつしよ聞きた、姉者人あねひとで
有あたよな、珍めずらしい對面たいめんと、いふ中見付まつる竹館たけやかたの、切先きりさきそつと取と上げて、
ふしきなど眉まゆみ皺しわ持歸もどつたる竹館たけやかたと合あして見みれば切口きりぐちの、志しつくり合あ
た此切先きりさき扱あり小栗栖おぐらすの村むらはづれ、數垣すうがき越こえ手てごたへせし其時そのときと切折きりちぎ
しが、思おもはず我家わたくしへ廻まわり來くわしか、嬉うれしや悦えびしやど、奥うちを見み入いてつゝ立
上あれば、さつきとゞめて、一作いつざく一間いちまんをめがけ氣色けいしよくをかへ何なにしよ行きまや
るととがめられ、はつと思おもへどとぼけし顔おもて、ヤ何なにしよ親父様おとうひやうのお目め
かことよ、父上おとうさんのふ目めかこりよ行物ゆきものが、思おもはず我家わたくしへ廻まわりきた、此竹

館とハ何の事、それと其様子ハ、はし擺かみの兄弟ハ、此竹館
と同じ事で元が一本、其一脉の兄弟を切はなして別れく、又年月ハ過
したれど、根が一本の竹なれば、ふしきよ廻り玄つくりと、逢たハ嬉しい
悦べしいとナ事でござります、すりや久しうりで姉ニ逢たがそなた
ハ夫程嬉しいか、ハ嬉しうなふて何と致しませふ、ナ姉者人、お前が是迄
添てござつたお連合の名ハ何とナます、ナわしが連添夫の名カ、武智
十兵衛光秀といふがの、そんなら最前君の様子をバ、門口で残ら
ず聞、た主ころしの大罪人引くもつて手柄ハラヒニせんと、かけ行向ふ立ふ
さがり、悪人なれど夫ハ夫、そあたの爲も現在姉聟夫を搦捕からめふとハ、あ
んまり難面どうよくな、久しづりで廻り逢た、姉が頼むや手を合す、どふ
ぞ此場を見遁して、夫共叶ハぬ事ならば姉から先へ殺して行きや、さも
ない内放さじと歎とむれど屈せぬ一作、ナアおろかく敗軍の大將忍

んで我家へ入込しと、早くも敵へ渡開へ數千騎を以て此家をかこめば、
譬此塲のがへ遁れても、武智が命かたへ籠の鳥、叶はぬ事と聞悲しさ、そんなふ敵
へ注進有て、人數を以て取卷しか、ア、ばつと驚くさつきが胸むね、ひつしと
ひゞく、陣太鼓、貝鐘かいのよ氣きもさんらんし、狂氣きやうきの如くかけ廻り、間の戸障子
引ひかれ、西にしの山崎淀八幡、東ひがしの木幡狼谷、山やまみならび里さとみつゝき、挑燈松
明篝火あかねのかげ、よきらめく、旗指物、錐ささを立たてるの塲はなわせきもなく、只鉄錘てつぼうの如
くなりさつきの目めもくれ心こころきへ、何なんとせん悲しやと歎けバ、一作聲高
く、斯數万すうばんよて取卷とりまきバ、所證叶しよせんぬ武智が運命うんめいやみく、人手ひとてよかけんよ
り一命いっめいハ一作つけが、や受うけるとかけ行ゆきを、さしへて猶どうも留とどるさつき、ヤ面おもて倒たおな
と押おしのけ突退つきのけ奥おくをめがけて、いつさんよ行ゆきをやらじと追おて行ゆき、時ときも移うつは
ず討手うちての大將櫻井小新五軍勢引連ひきつれ大音上おほね此家の内うちよ武智十兵衛光秀
懸かかし有條、久吉公の聞うかみ達たつせり、尋常じんじょうみ翻出かぶつだせば、其通異儀かうぎよ及およべ、踏ふて

んで討取んいかよ」と呼へれば、一間の内より嘉平治が轉寐ながら
高笑ひ、大盜人の猿冠者めよ使へるも猿松めら、某が茅屋より向ひ、計
手呼へり案外千萬脚切込ば粉骨碎身早く歸つて久吉めよぬかさふれ、
龍の腮の玉より共此嘉平次がかくまひし武智光秀、取得る事思ひも寄
ず、達てほしくバ久吉めよ直より來よ、やらみ殺してくれんすと、つぶさみ
やせと脚踏のばし起もわがらぬ不敵の老人、久吉公より對し過言の振
舞、身の程忘らぬ瘦浪人きやつぐるめよ討取どすでよ入んどひしめく
折しも、やはやまるな暫く待、真柴大領久吉、松下氏へ直談せんと、呼へる
聲、小新五娘、主人の成と諸軍勢兜を土より平伏す暫く有て真柴久吉、
戦場より出立姿引かへて、鎧兜もだいなしの、三の圖迄引からげ、革巻柄
の一腰の弓矢より替る鎧頤突出す手先兩足より踏かためたる六十餘州、憚
かる方になけれ共主と病よ肩臂の、身すぼらしくもかつしくばい、召

使の此下ニ吉別れ程經しに顔ばせ、拜して言上すべき旨有に對面希ム
と身を譲る有様を、ざろく見下す嘉平次が、漸起てたばこ盃、さげて間
近く高あぐら、今天が下を掌握し、四海、よ羽打大領なれど、いまだ主従の
縁切ぬべ、我爲みはいつ迄も草履取の此下兵吉、奴姿はさこそく、仰の
ごとくいまだお暇給はらねば、ほ仕着の此わんぼう、一腰迎も古主の賜
我爲の髭切膝丸、肌身離さず其儘よ昔の形でほ對面も、古主の恩を忘ぬ
性根、左程古主を忘ぬ汝が年を經れ共、頬出しせず、剩へ我館を十重廿
重よ追取卷某よ敵對する條、奇怪千万と居尺高よきめ付れば、ほ、ほ館を
出しより信永公よ召使はれ、爰かしこの戰ひよ、鎧兜を脱問なく、股は馬
上よすれられ破れ骨身を碎く數个度の軍功、日よ志たがつて立身出世、是と
テも稚より、兵法軍術、指南有し古主のおかけ、とくよも伺公し古への、
詔恩を謝せんと存れど、軍務よ暫しもひとましく、心よ思ひぬ延引不沙

次、玄かのみならず、館を取巻、家來共が雜言過言、立腹の去事ながら、主を討たる大惡人、武智もよつてなす事みて、全く貴公へ敵對（きのうたい）、あらま逆（さか）を以て順（じゆん）を討、天が下を盜む盜賊、順を以て逆を討、臣が忠義を推察有て、武智を出し下さらば、此上もなきに原恩偏（かわらねんひ）と頼奉ると、日本國を取ひしぐ兩手を土（つち）に附とも、始の過言引かへて誤り入たる風情なり、嘉平次猶も聲あらしげ（さう）ぬかしたり猿冠者（さるくわじや）め、尤武智主を討、其國を奪ふかられ、國賊共いひ逆賊共いふべきが、さいふ儕も大盜人、先年桶皮の胴丸、求め來れと手渡し玄たる金子七両、今もおいて鑑（こうか）も求ず、其儘も打捨る大衛人をせいせんと思へば、先己をせいすといふ聖賢の道も守らず、玄やらくさい討手呼へり、誠武智が討たくば、先儕が非（ひ）を改めよ、邪非道の權威（けんび）で、いつかな動かぬ嘉平次と面色筋を顯（あらわ）せば、昔よかららぬ氣丈のお詞、一も以て理も當れり、斯あらんと存ぜし故、求め來りし桶皮胴

ヤア者共、云付置し胴丸の鎧、早々是へ持來ればつといらへて下兜手がき
え立たる具足櫃、目通り昇居れど、嘉平次見るより立上り、主よ暇を
くれ、館を立退不届者、己が勝手のよい時々求來りし此鎧、某が用ひ立
ぬ、持て歸れど足下よかけ、踏飛す櫃の内、桶皮ならで小櫻のまだ咲もせ
ぬ苔の若武者、よろふ姿の武智が一子、重次郎かなつかしと、さつき
奥々走出すがり歎けべ、嘉平次も案々相違々言句も出す、黙して、暫し詞
なし、久吉猶も手をつかへ、御謫の桶皮胴丸、延引あがら只今出來御心々
叶ひしやほ所存いかゞと詰寄べ、さでかした兵吉、此鎧さへ調へば、かく
まひし客人へ約束の詞も立、天晴うるやつ、當座の褒美と懷中より、取出す
一札投やれべ、這寄て押抜き、ヨリヤ是拙者が年季證文、其證文を戻すから
れ、主従の縁は是迄、今ハ日本弓矢の棟梁、真柴大領久吉公、同席も恐有と
庭々飛おり三拜九拜、こなた立て悠々と、上座みすしむ、其有様、自然と

備へる武將の權柄紺のとてらも蜀江の錦羅くごとなり、久吉優美の
聲高く、我賤しくも民間々經上り、當時四海より權を取も、天運とい云なが
ら皆信永の御惠其大恩有主人を討れ、無念凝たる吊軍、運よ叶ひて勝利
れ得れ、共討渾たる大將光秀、草を分つて尋る所はからず此家又忍び居
る由、早速討手よ向ふといへ共、古主よ對し不忠の某、何がな心よ叶ひん
と思い寄たる此土産へ怒を説る寸志ぞ、情を籠る明智の詞、はつとこ
なたへ頭をさげ斯情有大將共存せず、出る儘の悪口不禮、まつびら御免
下さるべし。去よてもふしきない彼等が身の上、現在親の某さへ、最前一
間で立聞迄武智を聟とい存せぬ様子、くわしく御存えられしいかな
る故と聞もあへず、夫こそ其悴が肌よ付たる守こそ、則貴殿の家の
重寶、三面の大黒天、いよしへ某此家よて子守せし其砌我懷よ育し息女
よ、付置れし故見覺たり、其守を所持する悴、松下氏の縁類と扱こそ斯

はからふたりと仰を聞え覺有。さつきに涙押ぬひわたしが稚い時よりも肌身はなさぬ此ほ本尊則三面一觸なれば親子三人ちりぐく成迎も、もと一體みあひあふ爲と重次郎付置しが、ふしぎよも此家みて廻り逢たる親子三人、誠みたうどきに守りと悦ぶも又涙なり、櫻井小新五すくみ出、手み入たる敵光秀、兎や角く猶豫の其中よ、風をくらふて逃のびんもはかれずと、いへせもあへず何さく、運盡たる武智が命數此家よおいて滅する印、早天文よ顯られたれど、さのみ勞する事なけれ、^ナ嘉平次天命盡し武智光秀、搦めて出されよ、早とくくと仰みはつと云あがら、一旦武士のかくまいし詞の義理立兼れど、小新五にらつて、^ナ賛舅の縁み引れ、猶豫する未練者、^ナ未練にさらくいひゆ、未練でなくば討取か、但踏込召捕ふか、^ナどうじやと手詰の切羽、こなたの一間に豊高く、宿の返禮よ進上す我一命受取れよと引明る、一間の内み光

秀が腹々突込覺悟の鋤、うども様か悲しやと。かけ寄重次郎女房も俱よ
かけ寄右左すがり歎くを押退突退^{ヤア}眼前討手の手前も耻ず、見苦しき
此振舞しされやつとよらみ付運盡し武智光秀立寄て首取と引廻す鋤
よすがり^ア待て下さんせ私し去れた身の上なればよらまれても呵
られても志よとがあいとあきらめふが可愛そふみ重次郎いひゝ親と
子一世の別れ暇乞して此子よも諦さして下さんせといひせも立す塵
あらしげ^ア親子とい何のたゞ言、主殺しひ從類を絶す^{タマシテ}捉某^{タマ}子が有べ
科^{トガ}の遁れぬ逆磔そこへ心の付ざるかたひけ者、たゞへ久吉の情みて、悴
が命の助かる共、我子といひゝ後^ト迄、主殺の悴なりとさみせられんが
不便さよ、勘當した親子でないと聞て悲しき重次郎、何私を^ハ勘當とや、
うはつと計み歎しが、何思ひけん鎧^{トガ}の上帶解より早く指添腹^{ミツテ}ム突立れ
べ、母^ハ見る^カ狂氣のごとく^{ヤレ}情なや何故の切腹と、悲しむ聲^ハ武智も

胸り嘉平次もおろく立寄介抱す手負ひ苦しき息ながら、父上主殺し
みせまいと思ふて勘當するとおつ玄やるに添ひござりますれど、
わ玄や主殺しの子といはれてもやつぱりお前の子よ成たい夫で一所
よ腹切て死ます程もふ堪忍して元の通の親子じやどいふて聞して
下さりませ、やかし様、わしが死だら喰便がござりますまい。隨分煩はぬ
様にして、ども様の跡角ひ、わたしが跡も逆様ながら、ほ回向頼上まする。
く術なふて物がいられぬ、もふ目が見へぬ、父上ひいづくと、必ず勘當
赦して下さりませ、や久吉様、私が體を成敗して、ども様の科を赦して、
拜ます頼ますと、苦しき體をはび廻す、あなたを拜みこあたを拜むだん
まつま、惜や生年十三の、昔の花とちりうせたり、悲しやと母親ひ死骸
を抱聲を上、重次郎よ怖い父御計を親と思ひ、母の親みてあらざるか、
夫又別れ子又別れ何樂しみの有べきぞ、我をもつれてゆけや、泣涕歎

べ嘉平次も初孫の顔初て見て、初て悲しい憂目を見る、おりやよくく
の因衆人いんぐわ、孫よ、親よ勘當かんとう受るのが、夫程々悲しいか、われが様な孝行な
者が、主を殺す者の子よ、生れて來たりよくくの業がむか因果か見せしめ
か、惜やかにいや殘念やと、日頃の丈夫もどこへやら取乱したる祖父娘、
死骸しがいよ取付抱付前後正体伏乞ふきづむ、始終の歎かなう久吉もかんるい袖をひ
たさるれば、強氣の武智も恩愛おんあいよ、くらむ眼まなこをくいつと見開き、親の爲ため
の云ながら、主を討たる其報そのごうひ、忽廻りたうちり小栗櫛おぐらざ村、土民どみんの爲竹館たけやかたよて、突留つづめ
られし磔はぎつけの、撻ね天あま給たまれる刑罰けいばい、悴くわいいでや追付おづけんと、きどりくと引
廻まわしまわ介錯かいしゃくといふ聲より、早くも一作一間をかけ出苦もなく首を打落
せば、久吉見るもでかしたく、一つの功ごくの立上たてあ約束やくそくの通今とくじん主しゆ從じゆ、小
西彌十郎行長と仰あおはつと飛としざり、松永彈正まつながだいじょうよすかされ、敵の縁者えんざ
つながる某のれ家來とあし下おろさる上う一命をなげうつて、忠勤ちんじんをはげむ

べしと悦びいさむ若者わがわ。小西攝津守行長と朝鮮國の果迄も其名を恐
れ敬うやまへり、大領重て主殺しの大罪人、竹館を以て突留たれば、國法こくぽの早濟はんす
だり、親子おやこが死骸しがいの親子おやこよ得さず、心任せこころまかみ取營とりよるみ跡あと吊つるふて得させよや
是重次郎が孝心こうじんを、かんずる餘りと情の詞ことばはつと二人ふたりの有がた涙猶なまら
てしなき恩愛おんあいの、火宅ひたくの門出もんしゆと嘉平次かへいじが髻いりふつゝと押されば、さつきも
俱とも々黒髪くろかみを切きて、捨すてたる夫の首くびなくなく死骸しがいよ盡つくせぬ別れ、早凱陣はんがんと諸
軍勢恐れ傳かづく大將は、奴やつ成天下取てんげ、小西が忠義武智ちゆうぎぶぢが不道ふどう、今いまよ印いんの小
栗くるす橋はしよわづかの石碑せきひ有明の月つきを残のこして「出て行でて

○第十

眞柴大領久吉公、武智ぶぢを討うし、武功こうじやうよて豊臣關白よよどぐくさんぢやくと推任すいにん仕給しごくひ、立願たてねんの
事有て住吉すみよし詣まいの海道筋かいどうすじ、中新家しんじゅうけよ休息所きゆの茶店ぢみやを玄そとつらひ、久吉假家かりや
よ入給いりごくへべ、先供せんくの武士士官よは加藤かとう主計しゆけい頭かぶ清正せいぜい、小西攝津守行長前後まへうよ從つ

ひ奉る、殿下仰有けるに、日本ハ小國なれば、軍功の輩ニ充行ふべき地形
なし、去ヌよつて新羅百濟高麗ヘ渡海し、三漢を退治せんと思ふ故、往昔
神功皇后三漢退治の吉例ニ任せ、住吉明神の御加護祈ん爲のけうの社
參ど、仰もあへぬ又小西加藤謹で希見沙汰然るべく存奉ると、や上れ
バ、殿下は機嫌きげん悪わるく、然らば汝等兩人を朝鮮攻の先陣を云付ベし、其旨諸
國の大名ニ觸ふれさせよ、只今も此茶店を殿下茶屋と号、末世ニ所の規摸
ニせよと懲いさり立給へば、早ニ立ニ供觸ごふれして、加藤小西左右ニ從ひ殿下
を守護し、社參有、時ニ謳歌の諺ことわざを書行ねたる太平記、千里も一步ニ始
れバ、三日ハ三年も續べき、其竹の葉の代ニかけて今ぞはるべの難波津
ニ諸職商賣諸藝者も花のさかりの國津民、五ニ成就民安至いた、おさま
る國こそ出度ゆでけれ

三日太平記

明和四年丁亥臘月十四日

百三十一

三日太平記終

明治廿四年十月

日印刷

明治廿四年十月

日出版

發行者兼
發翻刻
內藤加我

日本橋區通四丁目四番地

日本橋區新和泉町一番地

印刷者
瀧川三代太郎

發行
金 櫻 堂

日本橋區通四丁目四番地

